

習本部に於ける方法が主として知解に訴ふるが如き性質のものであつた場合は、之を補ふ爲に本段に於ては情意に培ふ手段を講ずるがいゝし、又反對に學習本事の取扱が主として情探を昂騰するやうな方法によつてゐた場合は、本段に於ては努めて知解的な取扱をした方がいゝ。約言すれば第二條と第三條とは其の取扱方を轉倒すればいゝ事になる。

要するに、此の部の仕事はそのとつて來た研究の方法の巧拙を反省し、第二段に於て主として情調的解決法によつて解決した問題に對しては、表解を作り、記録に残すなどすると共に實演、製作等の方法に訴へて更に知識の收得を確實にし、記憶に訴へ以て知性を鍊磨するがいゝ。又第二段に於て主として知解的な解決法即ち第一次の研究形式を深刻にして反復したるが如き方法をとつた場合に於ては、本段に於ては除るに教師の所感にきき、或は史實の批判を試み、因果の道理をたづね、現代と比較を試みるが如き方法をとつた方がいゝ。かくすることによつて何れの教材も、又何れの方

法をとつた場合に於ても夫々に一度は理知も情意も刺衝され夫々に鍛練される譯になるものである。之を表解すれば大體に於て次の如く云ふ事が出来る。

第一段

第二段

第三段

知解を主とする教材

獨自學習

同上及相談による學習

聽取

情意の練達を主とする教材

獨自學習

聽取による學習

表現

以上第一段より第三段に至る總ての順序を通して之を眺める時、私は次のやうな事を感じる。それはこの教授の一般形式は恰も細長い菱形を以て進行するものであると云ふ事である。即ち問題の提供から第二段の新問題の解決に至るまでは次第に幅員をまして行く形式であり、それ以下は逆に漸次幅員を狭くして行くものである。一個の問題は漸次複雑な作業を繼起して、心意活動の最高潮にまで之を導き、それより又漸次之を約結縮少して一のまとまりたる知識に縮約して行くと云ふ形である。これは必ずしもさうだと云ふのではなく、自分にさう云つた感じがあると云ふ迄の事である

が、この心持を讀者に傳へることもあながち又無用な事でもあるまいと思ふ。

## 五 教材の分類と方法の適用

情的教材と知的教材 教材を分類するに其の内容によつて人物を主とするもの、事件を主とするもの、文化の事實を主とするもの、因果の關係を推究せしむるもの等に區分して見る事も出来る。然して其の區分に從つて夫々多少の取扱上の差別をつけて行く方がいゝ事もたしかであるが、今こゝでは夫等の分類に從はないで、内容の性質によつて之を二大別し情的教材と知的教材と云ふ風にわけて考察する事にする。この分類の仕方他も夫れと同じく決して嚴密に峻別しえらるゝものではない。

ここに情的教材と云ふのは仁徳天皇、天智天皇と藤原鎌足、和氣清麻呂などゝ云つたやうな内容のものであつて、其の内容が主として兒童の感激に訴へる性質のものである。現行教科書のそれからすると、教材の大部分は之の部分にはいる。尤も同一課

の中にもある部分だけが情的教材であつて、他は知的教材だと云ふ事もある。それらは取扱の場合、所謂一方法的單元のきり方によつて適當に處置するがいゝ。

知的教材と云ふのは其の反對に、内容が主として兒童の知解に訴へる性質のものをさすのであつて、例へば聖徳太子、弘法大師等と云つたやうなものである。そして前にも云つたやうに現行教科書では此の種のものにはいるのは極めて少い。同じ聖徳太子の課中でも情的教材の中に加ふべき部分もある位だ。

分類の標準 でこの二大別の嚴密な分類の標準と云ふものはない。従つてこれは頗る非科學的な分類のしかたたるを免れない。只だ著者がこうした分類の仕方をとつたのは前章來のべ來つた教授方法上の都合によつたもので、むしろ便宜上の分類だと思つてよい。故に分類の仕方は一に教授者その人の考にまつ外はない。即ちその教材が兒童の感情に訴へる事が多いものであるか、知解にまつ事が多いものであるかと云ふ事は、一面から云へば教師その人の該教材に對する態度の如何によつて決定する。だが

ら之を逆に云へば、方法が教材の分類の標準を示唆してゐると云つてもよい。然して又初に述べたやうに其の人の性格が理屈っぽい人であれば努めて多くの教材を知解的にながめるし、情味にとんだ人であれば情的教材とながめる。だから結局は取扱上の事は否むしろ教育そのものは其の人の性格に左右さるゝものだ。人格即ち方法論もそこになりたつ。

敏感な讀者は前章の終に於て既に茲に述べんとする方法の大意を推知してゐるであらう。既に教材に對する見解が立つたならば、これからは、方法の適用に移るべきであるが、それは既に前章の終末に於て一寸ふれたやうに大體に於て第二段と第三段との取扱を逆にしたやうなやりくりになるのである。

知的教材の取扱——知解より情意へ——教材の性質が主として事件の解明諒解を主とするやうなものである場合は、教授本部即ち第二段に於て十分兒童の知識を叩き上げるがよい。分解し解説し引證し、表圖を作りなどして出来るだけ其の事實の諒解を完全

ならしめ、更に之を確實に把住し、牢固たる記憶の庫に收穫せしむる爲に、出来るだけ様々の手段を講ずるがよい。假りに國史教授の目的を二つに分けて考へるならば、其の前半國體の大意を知らしめると云ふ部分の目的をこの段に於て十分完全に達しうるやうに力めなくてはならぬ。

知解を十分にし、記憶を強固にする爲の方法手段としては次の事項をやるがよい。

- 1、根本史料の活用
- 2、直觀方便物の利用（繪畫、模型、遺物、遺跡等）
- 3、教科書の分解的吟味
- 4、表解の作製
- 5、系圖、年表、地圖等の活用
- 6、質問、討議
- 7、参考圖書の調査等

既に前章に於ても述べたやうに、これらの仕事は主として兒童自身の活動にまつものであつて、この場合教師は兒童の相談相手になつてやればよい。或は研究の方法を示唆し、或は其の結果を推奨して彼等を激勵しなどして、その興味をそつてやらねばならぬ。その仕方に兒童の分團的にやるものと、教師と兒童の相談によるもの、全然兒童が獨自的にやるもの等があることは既にのべた通りである。

さて以上の作業を以て略し事件の真相を究明し、事實を確實に把持し得た以上、學習は次の段階に移るべきである。而して國民たる志操を養ふと云ふ歴史教授目的の後半を達成する爲の努力がそこにいたされねばならぬ。従て其の方法は努めて總合的、直接的、全體的なるを要する。其の方法として次の如きものを上げる事が出来る。

- 1、兒童感想の表現
- 2、事實の批判と現代との比較
- 3、教師感想の發表

これらの作業によつて兒童は先に理解し記憶した事象の上に、更にまとまつた——大局からみた教師や級友の感想や批判などきいて、自己研究の結果に反省を試み、また渾然たる一個の氣分を感受する事によつてその情意を刺衝し、或は愛國の心情に燃え、或は實行的氣分に動かされなどして、ともかくもそこに深い何等かの印銘を刻するに至るであらう。これを以て知解より情意への過程を終了するわけである。

情意より知解へ 情的教材の取扱が大體に於て今の反對の順序方法をとるべきは既に讀者の推知してゐる事であらう。學習前部即ち第一段の作業は二者共に相同じい。さて第二段の學習本部に於ては、主として兒童は學習の方法として聴取による事を使とする。彼等は主として想像をはたらかせ、情操を高調させて教師の具體的な説話に吸ひ込まれて行くべきだ。そこに渾然たる情のアトモスフィアが作られる。その暖い氣分にひたつて其の時限の取扱を終結すればよい。

此の場合に於て注意すべきは左の事項である。

- 1、説話は直観的なるべし。
- 2、説話は総合的にして區分せざるを可とす。
- 3、復演の必要なし。

4、板書を少くすべし、強ひて行はゞ表解式、羅列的な方法をとらず、つとめて模式的、直観的のものたるべし。

5、兒童に問の形を以て話しかけ、彼等の推究——想像——判断を促しつゝ、常にその期待心、追究心に訴へて進行すべし。

説話を直観的にせんが爲には、話術の研究を要するがこれは別項に述べたから略する。説話を余りに區分する時は従つて話もきれぎれになり、漸くまとまりかけて來た氣分の破壊を來す恐がある。復演の不可なるも全く此の理由に基く。表解的の板書は兒童の頭を知的作用の方面に導きやすい。従つて情操の喚起を邪魔するものである。模式的、直観的の板書と云ふのは例へば大人物を大字でかき、けらいや其の他の小人物

を小さくかくと云ふが如きもの、戦争の事を研究する場合ならば、兩軍の位置を考へて對立的に其の主將の名を記し話の進行につれて鳥瞰圖式にちよいちよいと記入して行くやうな方法を云ふのである。

既に教師の巧妙なる説話術によつて兒童の頭に強き情意の活動を促進し得たならば、其の時限の教授はそれを以て打ちきるがいゝ。批判も所感も何も入らない。陶然たる氣分になつて「あゝおもしろかつた」と云つて出てくればいゝ、世間にはやゝもするとこの點を批難する人がある。面白かつただけでは駄目だ。覺えて居なければ役に立たないと。然しそれは余りに愆が多すぎるものだ。今日情意方面の考查法が行はれ得ない限り、吾々は歴史教授の結果に就て非常な損な位置にたつ。今日の結果査定法と云ふものは全く知解と記憶との考查であつて、情意陶冶の功程を調査する事が全くない。然し乍ら吾々は記憶や理解の考查に零をとつたからと云つてかくの如き歴史教授の結果を零とは見なさない。情操は必ずしも表現し得らるゝものではない。不言

不語の裏に動かすべからざる或るものの存在することを直感する事が出来るではないか。

只だ吾々が憂ふるのは盲目的な感情に刺激されて、突拍子もない時代錯誤の感激を敢てせんとするものゝ輩出である。

千仞の崖上を通る一人の紳士があつた。彼は現代式の教養に於て缺くる所なき人物であつた。彼は愛國の何たるかを知つてゐた。人情の何たるかを知つてゐた。人の危難を救ふ事の美德も心得てゐた。然してそれらの方法としても尤も合理的な手段を考察するだけの知見と教養とを有してゐた。彼の前に一隊の労働者があつた。彼等は彼等のケルウブに醸成された人情を解し任侠の情をもつてはゐたが、新しい知識と合理的な頭とを保持せてゐなかつた。果然この一團と彼の紳士との前方に於て驚くべき事件が突發した。彼等の行く手に當つて他の一人の旅人があつたか、彼は誤つて其の崖上よりもんどり打つて谷底に墜落した。其の痛快な様をみて労働者は拍手して笑つた。紳士は嘆きといたましさと、其の労働者の無遠慮な態度とに憤慨して顔をそむけた。然し次の瞬間に於て身を躍らしてその千仞の崖へとび下りて、その遭難者救助に向つたのはその紳士ではなかつた。だが其の労働者も亦可惜一命を失つて了つた。

諸君！諸君はこの何れを取らんとするか、知解にあかるい人はとかくこの紳士の如

く、只だ感情にのみ厚きはこの労働者の如くである。二者その一を擇べとならばむしろ吾々は労働者を學ばんか。文運の進歩につれて情熱の人の減り行くを思ふては誠に寒心に堪へない。

然しながら偏狭なる愛國心が國を誤つて却て國家の前途に暗影を投ずるが如くに、時勢の進運に眼さめざる盲目的な情熱の發動のみでは、これ亦誠につまらない話である。吾等の理想はこの二者を打つて一丸としたものになくはならぬ。明るき叡知と燃ゆる情熱、一身をすてゝも行かんとする氣概と、然も死せずとも救済しうるの道を考察しうるの頭ある人をほしいと思ふ。然してその任務の一端を吾が歴史教授が擔當しようと思ふのである。

そこで話を元に戻して、情意より知解への取扱に於て吾々は既に情意の訓練をといた。これから畫龍點睛の趣を以て聊か兒童の知的頭腦を陶冶する事が必要である。然して其の作業が次の時限に於て行はるべきは勿論である。

情的教材取扱の第三段に於ては凡そ次のやうな作業をやつたらよい。

- 1、説話と教科書との結合（整理のため）
- 2、要項（又は表解）等の作製（記憶のため）
- 3、同化されたる事項の表現（記憶を確實にし更に情意を高調するため）

A 綴方に綴る。

B 談話若しくは對話にて。

C 學校劇に演ずる。

教材の性質に應ずる方法の適用として極めて一般的に一應の順序をのべたのであるが、この順序方法は要するに一般的に其の筋をのべただけの事であつて何時何れの場合にも之にあてはめようとしてはならぬ。又かく嚴密に適用され得ない事も既にのべた通りである。只だ此の精神を以てこの方法を活用されん事を實際家諸君に望むものである。以下章を追ふて個々の作業に就て詳述し、其の實例にまで及ぶであらう。

## 第九章 歴史科學習態度の馴致

○學習態度馴致の内的基礎

○學習の方便物

○同外的基礎

○問題構成法の指導

學習態度の根本的基礎は兒童の本能に出發する。兒童の自發的なる活動の欲求に掉してそこに活動の資料を與へ歴史科としての方法を指導し、心意開發の關門たる感官の對應的修練を経て初めて、學習態度は築かるゝ。即ち人間の心そのものと、心の門と、心を培ふ資料と、然してその資料の取扱方とを悉して初めて完全なる學習態度が生るるのである。本章に於てはそれらの點に就て考察を加へる。

### 一 學習態度馴致の内的基礎

學習が創造であることは既に説いた。創造には二つの根本的な要件がある。(一)自主<sup>△△△△△△</sup>的なることと(二)繼續的なることと<sup>△△△△△△</sup>のそれである。創造は如何なる場合に、如何にして實現さるゝか。思ふにそれは突として神來の如くに或る事を創造する場合と、不斷の努力によつて一步一步築いて遂にある創造に到達する場合とある。前者は天祿的の創造であり、後者は努力の賜である。而して前者が自主的自發的に創造せらるゝものたるは論をまたない。神の命ならいざ知らず、他人の威壓や強制によつて創造ある事はない。創造はもつと第一次的なものである。後者の場合に於て繼續的努力の必要なる事も亦縷説の必要はない。そこで吾等の學習に二つの根本的な要件、即ち自主的自發的であること。繼續的、努力的なるべき事の詳説に移らう。

自主的なること 或は自發的と云つてもいゝが、自發の語は其の出發に於て自らす



ゝんで發したと云ふ意味にのみ解され、やゝもすると其の活動は敢て自主的でなくともいゝと云ふ風にも解せらるゝ恐がある。即ちスタートさへ自發的であれば、あとは教師から引きすり廻されて行つても矢張り自發的と云ひうる。そこが自發と云ふ言葉に

不満足な點である。自主とは文字の示す如く何時迄も常に兒童自らがその仕事の權威者となり、主人公となつてやる事である。スタートに於いては元より自らの心に従つてゐる。その後の活動も自ら主となつて續ける。さう云ふ譯で自主の語を撰んだ。これも意味さへ徹底してゐれば自發的と云つても好い。

學習が自主的でなくてはならぬとは何を意味するか。

### (一) 目的の自覺

### (二) 方法の明確

これである。目的の自覺は更に之れを考察すれば問題の自己選擇と、解決の欲求と、活動の要求などをさしてゐる。即ち或る問題を自ら擇んで、俺はこの問題を解決しよ

う、是非解決しなくてはならぬと云ふ考が起り、さてそれを實行しなければ止まぬと云ふやうな觀念につき動かされてゐることである。換言すれば自分は何をやらうとするのか、自分がやりたくて堪らぬ問題は何であるか、それは何事を要求してゐるのか——自分の心は何を求めてゐるのかと云ふ明確な意識があることそれである。

次に又方法の明確と云ふのは、今やらうと欲する事、即ちその問題を解く爲には如何なる手段方法をとるべきか、その方法を立案工夫することと、その立案に従ひ、自らの思ふがまゝに活動することをさすのである。

さうした状態、さうした態度にまで兒童を導いて行くのが吾等の理想であるが、かくの如き自主的態度の馴致に向つては如何なる方法があるであらうか。

自主的態度の可能。抑も兒童は斯の如く果して自主的に自らすすんで活動するものであるか。吾等は先づ其の根本問題から解決してかゝらねばならぬ。

人間殊に兒童は本來活動的のものである。彼等に静止を要求することは實に慘酷で



る。次から次へと問題があれば人は不斷に向上するものだ。問題なく疑問なき生は誠に無意義だ。

著者は本書を起稿してから、問題に行き詰ることに手當り次第に参考書を披いた。其の数は實に十數冊に讀んだ。然もそれは皆一度通讀した事のある本ばかりだった。嘗て讀んだ時には何をどうして讀んだのか、此度みてみるに殆んど何の印象も残つてゐない。此度は僅かに一時間か三十分分るのであるが、頭が氷のやうに明るくて、すらすらと讀む事が腦に刻せらるゝ。心に求むるものあればだ。そしてその求むるものに撞着すると疑團一洗、何とも云へぬ快さを味ふものだ。疑あるものゝ幸福だ。

ここに疑問と云ふのは單なる知識の問題のみさゝぬ。不知のみが疑問云ではない。疑問の語はあたらないかも知れぬ。その内容を云へば心に充たされぬ空洞ある状態を云ふのである。充たされぬ處あるを自覺せる状態をさすのである。問題と云つた方が適當かも知れぬ。知的疑問——知りたい事があることゝ、情意的疑問——即ち如何であつたらう？と云ふ感情のうつろ、何事か實行したいがその機會を與へられぬ爲に充たされぬ心、それらをすべて指すのである。

これを歴史教授の場合に引き合せて云ふと、知的疑問は史的事實の解明によつて充たされる。情意的疑問——仁徳天皇が炊煙乏しき見給ひし時の御胸中はいかゞなりしか、或は又元軍十萬、皇土を襲ふ、恨骨に徹する。如何にして之を打ち拂はんか？道鏡の惡逆をきいては自ら立つて之を征誅せすんばあるべからずとの勇奮躍闘的な實行欲に燃え、然も之を果す能はざる意的の空洞を感ずるであらう。然してそれらの情意的空洞は教師の巧なる説話によつて遺憾なく充たされる。天皇の御心事は描寫的談話で展開され、兒童は胸をいため涙を催してきく、そこに問題は開決される、即ち空洞はみたされる。時宗の勇斷、清磨の出現、何れも兒童に代りて惡を誅し、邪を破る。これによつて彼等是一個の満足をうるものである。

繼續的なる事 學習訓練の重大な今一つの要素、繼續的なれと云ふ事は忍耐せよ、努力せよと云ふ事の意味になる。續けてやるにはどうしても辛抱強い事が必要だ。興味のない、もう死んだ事をも續けてやるにはどうしても努力しなければならぬ。ある結

果をうるまでは我まんして続けなくてはならぬ。或る問題を解決するまで、その空洞のみたさるゝまでは続けなくてはならぬ。之を続けなければ創作はない。

氣がむいて来て自ら進んで、自ら工夫して或る事を初め、然もこれを中斷する事なく繼續する事、これが學習にとつて尤も重大なる事である。そしてこの二つはその何れを缺いてもならぬ。在來の教授は多く自主的ではなかつた。然し或る力のために一定の時期は続けさせられたものだ。近來一派のものによつて唱へらるゝ自由教育などはやゝもすれば、仕事の初めには自主的にやり出すがそれが続けられないと云ふ嫌がある。

自ら道を求め、方を案じ、常に自己が己自身を支配して、問題の解決に努力する状態が、先づ吾々の理想的な學習状態である。この状態に至らしむる爲には幾多の實際上の注意を要する。

元來兒童はあきつばいものである。兒童の注意が五分と續かずに轉々する事は實驗

心理學者の説明をまつまでもなく教壇上の人の知れる處であり、その轉々する注意力をいろいろの方法を以て引きつけて行つても同一問題に二十分以上ともかくも引きつけておくと云ふ事は余程な苦心である。教法、教式の轉換を要する所以はそこに在る。この離散し動搖しやすい兒童の注意力を引つばつて或る仕事を完成させる爲には教師の方に於ても十分考へる處がなくてはならぬ。即ちこの續繼の爲には努力を要する。「もう止めたい」と思ふものを續けてやらねばならぬ。このねばならぬ心の状態は一種の努力状態である。そしてもしもこのねばならぬが外からの命令であつたならば、それは學習の本義からして大して價值がない。吾々はあくまでも外的權力の支配を排する。兒童は自らねばならぬものを痛感し、自らそれを支配しなければならぬ。

この問題を解決する根本の問題は『止したい』とか『もういやだ』とか云ふ感情を起させぬ事だ。換言すれば何時までも飽かせない事だ。更に別な言葉で云へば作業に興味

あらしむる事だ。然り興味は實に作業繼續の根本原因であり、やがて又努力の根源である。興味につれて兒童は何時までも努力を續けて行く、然らばこの興味はいかにして起すべきか。

興味を起す源の一つは成功である。成功ある處必ず興味に伴ふ。否成功の豫感も尙且つ興味の因をなすものである。成功並に成功の豫感を味はする爲に必要なものは次の事柄である。

- 1、作業——問題の適當
- 2、解決端緒の豫感
- 3、自信
- 4、過去の經驗

逢着した問題がとても齒もたぬやうな難問であつてみれば、とても成功の望はない。これならやれるぞと云ふ豫感があつて、初めて成功の興味を味ひうる。それが爲

には何と云つても其の問題が兒童の力に適當であらなければならぬ。元來問題は兒童自らが發見し構成するものであるから、彼等は全く自己に解決の見込のない問題は作らない。又作つてもそれにはとりかゝらないで自己の力に適當と信する問題に先づ解決の力を、向けるだらう。若し教師が問題を選定し或は示唆するやうな事があれば、それは必ず兒童の力を考へておかねばならぬ。

兒童の力は個々別々である。同一學級の兒童と雖も其の能力は様々である。従つて其の問題も亦様々であらねばならぬ。個別指導と云ふ事が云はれるのはそこである。

問題が妥當適切であれば解決の豫感は當然の結論として起る。だからこれは二者同一の問題とみても好い。これなら出来るだらう、これは憚うしてあゝすればよいだらうと云ふ緒口がついて居れば、必ずそれだけでも興味が起るものだ。況んやこれなら出来ると云ふ自信あるに於てをやだ。自信は過去の經驗から來る。然もその經驗は成功の經驗たるべきだ。又過去の經驗の有用な所以は單に自信をつけるばかりでない。あ

れならば愉快だと云ふやうなたのしみを招來する事も多い。「又面白いお話がきけるか」と云ふ期待の如きも過去の經驗によつてのみ生るゝ。

以上四つのは成功の豫感を起させるに大切なものである。

興味惹起上肝要な今一つの事は「認めて貰ふ」ことである。よかれ、悪かれ、大になり小になり、ともかくも何等かの形に於て自分の仕事に對して認めて貰ふ事は嬉しいものだ。劣等兒は劣等兒なりに何等かの仕事をやつてゐるに相違ない。よしやそれが問題にならぬものであらうとも、それを頭ごなしに卑下してはならぬ。何とか云つて多少とも其のとるべき點を發見して認知する事が教師としてその尤も大切な仕事である。苦辛慘憺してやつた仕事が教師の一笑にも値せぬ位つまらぬものはない。仕事の黙殺は教育上の大禁物だ。黙殺されるれば屹度次の仕事はいやになるものだ。

發達の幼稚なもの程はめらるゝと嬉しい。或點から云ふと教育殊に自主的繼續的の學習は「おだて」にのせる事であると云つても好い。おだてにのせる事は決して上つ調

子なほかゝした人間を作る事を指してはゐない。「やれやれ、お前はきつとやれる」と勵ましてやる事だ。これを刺激と云つても好い。現代人は刺激なくして生きて行けるものでない。強い刺激に動かされて活動を初め、活動を續けてゐる。學習上に刺激の必要なるも亦詳論の必要はない事だ。

さきに自主的ならしむる上に於て戰闘的な人生觀の必要をといいたが、こゝでも亦それに似た一事をあげたい。繼續的に努力せしめんが爲には一面に於て不轉退の意氣を吹きこむ事が必要だ。七ころび八起きの意氣だ。教師自身まづ此の意氣あるべしだ。多少の批難、二三の失敗に辟易するやうではいけない。最後の勝利をみるまではやると云ふ氣概を子供ながらも持たせたいものだ。

此の如きは到底不可能の事のやうに思ふ人があるかも知れぬが、必ずしもさうではない。實は兒童は頗る不轉退な氣力にとむものだ。吾々は子供の駄々に於てこれを見る。駄々をこねて止まない兒童こそ實に不轉退の兒童だ。どうしても初一念を徹さで

止まぬ氣概はそこに養はれるのだ。この先天的の素質を認むる吾等が、兒童に七轉び八起の氣力を養ひ得ぬ事はない筈だ。然し在來の教育が子供の力を抑へ、彼等に萌したいものをつみとる事に余計に努力されてゐた爲に、兒童のこの旺盛な氣力、親を回ました氣力もだん／＼磨滅して了つて無氣力なものとなり、すぐにへこたれるものになるのである。とにかく吾等は兒童に不轉退の氣力あることを信ずる、この根本に培つて益々彼等の氣力を盛にし何事にも容易に凹まない人物を叩き上げる事が必要だ。

吾等は歴史學習の訓練をなすべく、その根本要素として自主的、繼續的なるべき事をといた。自主的であり、繼續的であることがやがて創造の原をなすもので、然もこれらの要素は多くの兒童が先天的に備へてゐる事も述べた。そして又その養成上注意すべき二三の事項に渡つて述べたのであるが茲に附言したい一事がある。それはここにのべた事の逆を行ふのだ。逆と云ふ事は主自繼續的學習によつて歴史を研究せよ

と云ふ事の逆だ。即ち歴史を研究する事によつて自主的繼續的——戰鬪的の人生觀不轉退の氣力を養ひうると云ふ事である。結局兩者は互に扶け合うものだ。

## 二 學習の方便物

學習の方便物 換言すれば研究の資料である 學問の研究上必要な研究材料、それは學習の場合に於て之を方便物と云ふ。純粹思惟の學問でない以上、その研究に有形的な研究資料の入る事は云ふ迄もない。國史の學習に於て必要な方便物は大體に於て歴史の研究者にとつて必要な古文書、遺物、遺蹟等であるけれども、小學校に於ける學習であるだけに、其の外にもいろいろ必要なものがある。教科書、辭典、繪畫、地圖、等がそれである。今それらについて一々注意すべき事をのべて行かう。

教科書 既にのべたやうにこれは是非必要なもので、我國の小學校では國定のものを採用しなければならぬ事になつてゐる。教科書は兒童の力にふさはしいやうに作ら

れてあるから、兒童の學習に尤も都合がいゝものであるが、單に教科書の讀解が出来ればいゝと云ふ譯ではない。教科書を理解させるのが教授の任務であるかのやうに考へてはいけない。教科書は他の方便物と相まつて、學習をたすくるものに過ぎない。

改訂された小學國史は、従前のそれに鑑みて頗る平易に兒童向に出来てゐるから好い。兒童はあれを讀むだけで相當に了解が出来る。著者の學習法によれば兒童は學習前部即ち豫習の時に一回は必ず教科書を讀んで調べる。それから學習本部に於て、その材料が知解的なものである場合は、更にもう一度教科書の深刻な吟味を試みるだらう。若しそれが情的事項であつた場合は、學習本部の作業中に於て遂に彼等は之にふれずに了ふであらう。學習後部になると、情的事項を記述されたものは之を反復して讀む事になる。この反復して讀むのは理解をたすくる爲ではない。學習本部に於て一幅の畫をみるが如くに教師によつて提供され、自己の抱いてゐた情的疑問が釋然とした氷解してゐるから、彼等はその文章を讀む事によつて其の話された事を統一し、更に先に話

をきいて起つた情調を再び喚起して感興を深うするのである。即ち彼等は幾度か讀む事によつて其の感興を深め且つ味ふものである。尙之を表解したり、要項を作つたりして記憶と理解とを扶ける仕事に従事する。

教科書を寶典のやうに考へてゐた時代はすぎた。教科書は全く方便物にすぎないのだから、自由に之を利用し活用するがいゝ。難字句には容赦なく假名をふるがいゝ。文字をおぼへる事は歴史科の任務ではない。要項の拔翠や、簡単な補充事項の添加などはほとんど上欄の空白に記入させるがいゝ。備忘用として尋常科の兒童が別にノートを有するの必要はない。(練習用には必要だが)記憶のための筆記はなるべく教科書内に記入するがいゝ。肝要と認むる個所にはアンダーラインを引かせるがいゝ。

然し國史の教科書は大體に於て小説みたいなものだ。面白いから何邊でもくり返してよむのであつて、記憶する必要があつて讀むものではない。讀みたいから何時でも讀むものだ。讀めば自然とおぼへる。おぼへようとの努力が余り大でなくともおぼへる。



そこに恣うしたものの價值がある筈だ。之を要するに教科書使用の時期と目的とは次の如くなるべきだ。

知的教材

情意的教材

學習前部

問題を發見し構成し解説する爲に吟味す、

同上

學習本部

第二次問題の解決の爲に、ある暗示に従ひ特にある點に於て精査す、精査結果、要項表解等の作製を試みる事あるべし

使用せぬ事多し

學習後部

使用せぬ事多し

感興を喚起するために讀む。説話統一のためによむ。理解と記憶を確實にするため要項、表解等の作製を試みる事あるべし。

改訂小學國史が情趣を高めるために其の全體の調子が頗る兒童むきになつてゐる點は誰しも認むる點であるが、尙地圖、年表、系圖、御歴代表等、知解と記憶とをたすく上上の注意も中々周到になつてゐる。これらに就ては其の必要に應じて何時でも適當に利用するがよい。何時と限つたものではない。前にあげたのは其の主要なる場合に就

て云つたまでゝあるから。

歴史辭典 小學生程度によさはしい歴史辭典がある事は必要だ。たとへば兒童が自らの力によつて或る問題の解決を試みる際に一寸知りたい事が出て來た時に引つばつてみるやうにさせたい。

(されど政治の實權は自ら之を握り、京都所司代を置きてひそかに朝廷及び公卿をおさへ云云下卷三十六頁)

と云ふ文章に逢遭した場合に、之れは幕府が朝廷をおさへる爲においた役の名であると云ふやうな事は優秀なものは理解するだらうが、さて其の本質的な任務が何であるかと云ふやうな事はどうしても分る筈はない。之を知るためには矢張り辭典が一等都合好い。其の他本文の中に一寸人名だけが顔を出して其の出所も事蹟も記してないやうな場合、兒童は其人物のいかなるものであるかを知りたいだらう。こんな時に辭典を引かせる事は尤も有功だ。

辭典使用の時期は、學習前部及學習本部の場合に於ける知解的教材の取扱をなす時  
に限る。一般には自習時間や復習の時にも使はせるわけである。

**歴史的兒童讀物** 著者は小學時代に日本歴史譚と云ふものを讀んで、どれ位歴史に  
興味をもち、後日歴史學習のたすけになつたか分らない。多分小波山人の作だつたと思  
ふが、例へば神武天皇とか、豊太閤とか云ふ風に或る人物を拉へて其の人物の重なる事  
蹟を子供むきにかいたもので四號活字で三四十頁のものだつた。一冊が廿錢位で、價  
もやすいし、當時は随分普及したものだ。近頃は童話や童謡が全盛で殆んど其の影を  
みない。國史美談など云ふ本もあるが少し程度が高くて尋常科生にはむつかしい。各  
科の課外讀物が必要である事はこゝに改めて云ふ必要もないのであるが、歴史ものは  
歴史科の學習をたすくる爲のみでなく、單に子供の讀書慾を満たす上からも非常に要  
求さるゝものであつて、是非必要なものである。

近代は一般文學的作品、殊に戯曲の題材に史的人物が使はれる事がはやつて來た。

これは面白い現象である。著者はこの傾向が一般に歴史趣味を復興させる事だらうと  
思ふ。それはさておき、兒童讀物の中にも史的材料を子供向の戯曲にして出したらい  
ゝと思ふ。追々とさうしたものも出て來るであらう。著者も折をみて歴史讀物に筆を  
そめたいと思つてゐる。

これらのものゝ取扱は殆んど自習の時に限るが、たまにはは知解をたすくる爲に學  
習本部に於てやらせる事もあつて好い。然し要は兒童はつとめて慫うしたものへ親ん  
でゐる事が必要だ。

**歴史參考書** これは教師のみる一般の參考書だが、兒童の力は其の教育の仕方一つ  
でばどれ位のびて行くか分らないのだから、こんなものが子供に分るもんかなどと見  
くびらずに、解放してやるがよい。すると其の内には特に優秀なのがゐて、將來の大  
史家たる素地をそこで築き上げる事もないとは限らぬ。取扱の時期は前者に同じ。

**圖書館** 以上述べた事からして大抵圖書館と云ふものの必要が推せられたと思ふ

が、それらの書籍はなるべく一定の図書室に備付しておくのである。何れも一部や二部では足りぬ。高價なものは仕方がないが児童向のものは十部宛も揃へておきたい。この図書室は即ち學校圖書館であつて、教師も児童も共用のものである。ある場合はこゝにもつてきて學習をすゝめるがいつ。教室の擴張だ。一體教室と云ふものゝ觀念を四間に五間の一室に限つたものゝやうに思ふのがいけない。圖書館の經營に就てはいろいろ云ひたい事もあるが、それは他日にゆづる。

**繪畫** 國史の教授が直觀的でなければならぬ事も既にといた。然し乍ら國史は既に過ぎ去つた事のみである。直觀する事は絶対に出来ない。ドラマや活動寫眞の助をかりて、之を復演し、その復演を直觀させる事は尤もいゝ事であるが、それも今のところ不可能とすれば、結局は繪畫、遺物、模型等の助けかりて、直觀的ならしむるより外ない。

こゝに繪畫と云ふ中にはいろいろのものを含む。先づ尤も普通に用ひらるゝものは

歴史掛圖である。坊間でうつてゐるものもあるが大して好いものがない。然し外にならぬ。いからあれらでも便つた方がよい。小學國史には随分澤山な挿繪があるが、これは非常によい事だ。掛圖はあの繪を擴大して彩色をつけたものでもいゝ。これは修身掛圖のやうに文部省で拵ふべきものだと思ふ。藤岡氏なども同様のお考のやうであつた。

さて其の掛圖は單なる人物だけのものや、當時の風景を彷彿させるものや、いろいろ必要であるが、矢張目的は自ら二つに分れる。知解を扶くる爲のものか情調を高むるものかである。地圖の如きは全然知解をたすくるものだし、後陽成天皇聚樂弟に行幸したまふ圖や秀吉名古屋城に軍船の出發を望む圖などは情調を高める爲のものだ。目的が違へば其の取扱にも自ら區別をつけねばならぬ。然し情調を昂めるためのものが知解をたすけないと云ふのではない。こんな事は分りきつた事である。けれども説話が情調の昂騰を計つてゐる時に、知解に訴ふるやうな地圖の好きものを提供するのは不賛成だ、これは或點からは起りかけた感興の打つ壤しになるものだ。この點から云ふ

と一枚の繪に地圖や系圖などをこつたに欲ばつてかいたものは考へものだ。尤も經費の都合等で止むを得ない事であらう。それも利用法一つでは巧にやれぬ事もないが、なるべくなら別々になつたものの方が理想だ。

掛圖取扱の時期は其の目的によつて二様に分れる。若しそれが知解をたすける性質のものであつたら其の作業の何れの時にも活用させるがよい。幾度でもいゝ。然しそれが情調を高める爲のものである場合は多少考へる必要がある。

彼等の抱く情的空虛が最高潮に達した時、どうしてもみたされぬ洞、もうたまらなると云ふ迄になつて來た心の張りに打ち乗つて、其の繪圖をみせてやると云ふのは尤も効果が多い。だからこれは教師の説話のまん中に提出される事もあるし、或は説話の終期に提供される事もある。幾度かの問ひが推積し、兒童のあらん限りの相像が展開して、十二分の期待ではりきれぬやうになつた時に示された繪の印象は極めて深甚なものであり、且つ又その解釋力も強いものである。慙うして深い印象を刻まれた繪は

其の後幾度みても其の當時の感情が伴ふて起るのだから、余程價值が多いものだ。

尙こゝで附け加へておきたいのは、さう云ふ風に情意的取扱の場合に活用したものも後で之を知解の爲に利用する事があるのは差支ない。これらの繪畫類は多くは一面からみれば文化的材料だ。文化の理解をたすけ、當時の文化を表はしてゐるものだからさう云ふ意味にも之を利用するがよい。人物の着てる服裝、その持つてゐる持物——武器や裝身具や——四圍の光景など何一つとして當時の文化を語らぬものはない。これらの點に就ては大に注意して活用する處なくてはならぬ。

其の外繪畫と云ふ中にはいろいろある。他の參考書中に挿入された繪畫——例へば百科大辭典などには、歴史上容易に得がたい好い繪が澤山挿入してある。それらを見せやるもいゝ事だ。或は兒童の内には案外いゝ昔の繪などがあるかも知れない。それらも適當に利用するがよい。

地圖 地圖は其の性質が殆んど知解と記憶とをたすける爲のものである。史上の事

實が處と時との交叉點にある以上、其の一要素たる場處を蔑にしてはならぬ事は申す迄もない。國定小學國史に澤山の地圖が挿入されたのはこの點にみる處があるからだ。地圖の使用はこの點から考へても分る通り、つとめて解明を要する場合になくはならぬものであるが、情調を高める場合には必ず必要と云ふわけではない。之を使つても悪い事はないが、其の使い方には一寸注意を要する。

教科書に挿入された歴史地圖は其の要點を明にする爲にのみ記されたものであるから、之と對照する爲に地理科用の精細な地圖が必要だ。それは教室用の大きなものでよろしい。が折々之と對照して行く必要がある。歴史と地理とは必ずしも並行して進むものではないのだから、單なる一局部の地圖や、白圖をみただけでは、まだその邊の事を地理の方で學習してゐないものにとつては一寸了解が出来ない。さう云つた點からは非本圖と引合せるがいゝ。

年代表 地圖より以上に必要なものは年代表だ。それも余り細密なものはいかぬ。

極く大體の時代觀念をつくる爲のものでいゝ。年代表は縦にしたものがいゝか、横にした方がいゝかなど云ふ議論もあるが何れも一長一短ありで一概には行かぬ。どちらでも好いからハッキリと時代の觀念が分るやうになつてゐればいゝ。そして終始それに親む事によつて兒童に明確な年代の直觀が出来ればいゝ。年代表を作る人の誰も經驗する處は初の方ほど事件が少くて、其の長い時間が空白であり、後になるほど事件が複雑になつて來る事だ。上古の五百年と近代の五十年とは比較にもならぬ程近代史の方が複雑だ。事件の複雑な時代の歴史を研究する兒童は、それを却つて長い期間の歴史のやうに考へるかも知れない。其の點を特に注意しなくてはならぬ。

年代表は地圖と共に終始教室にかゝけておくがいゝ。場所の關係から教室の真正面、黑板の上がいゝと思ふ。(地圖は黑板の左方)そして其の長さは教室の長さと同じしてゐると面白い。四間の教室であれば年代表の長さも四間、その四間を凡二千六百年とみつゝもる。すると一百年の長さが約一尺になる。この一尺位の長さが百年を表は

すものとの観念を強く叩きこんでおけばいゝ。それで年代表をみれば必ず事件の多少などで惑ふことはない。

年代表は終始彼等の面前にかゝけてあるのだから、何時でも之を利用するがいゝ。この利用と云つても一寸指し示す位の事だから大して邪まにもならない。一時代が終つた時、或は一時代の初め等に於ては、特に丁重な取扱を要する事は勿論だ。

遺物模型 太刀、槍、鎧、靴、弓の如きものは大抵の處にもある。都會地であれば博物館や其他の種々の場所に陣列されてある。田舎でも少し舊家にはそんなものがある筈だ。其の外史上のものをもつてゐる家も少くない。それらは之を適當に利用するがいゝ。近來は理科會、音樂會などゝ、或る一科目に就ての會をやる事が行はれる。歴史會なども試みるがいゝ。さう云ふ時にそれらのものを陳列し、それに就て適當の説明を加へるがいゝ。

中大兄皇子のぬけた靴を鎌足が拾つて奉つたと云ふが、その靴と云ふのはどんなも

のか、まさか今頃の靴のやうなものでもあるまい。これらは到底遺物がある筈はないから、模型を作つておいてこんなものだったと云つて示してやるがいゝ。これだけで旺盛な兒童の想像力は、さまざまの感興をよび起してくるものだ。歴史の學習上に模型を使ふ事は極めて少いやうであるが、もつと獎勵したいものだ。

以上の諸方便物は學習のあらゆる場合に於て、其れぞれ活用するのであるが、普斷は特定の室又は廊下に陳列し、かゝけておくがいゝ。それらの點から云ふと其處に又學校博物館の必要が起つて來る。そしてそれは當然試みられねばならぬ事項である。

近時尤も高調さるゝ自由教育や創造教育を徹底的に行はうとするならば——本書も亦その思想に立つてゐるものであるが——どうしても圖書館、博物館、植物園、動物園、工場、實驗場等の諸設備を學校内に有しなくてはならぬ。それらの機關なくして自由教育を實行しようとするは木によつて魚を求むるに等しい。然し乍ら其れ等のあらゆる設備を學校内に完備しよう云ふ事は一寸望まれぬ事である。で吾々は其の

模式的な設備でいゝから出来る限り工夫し努力して、それらの小博物館、小植物園を設置すべきだ。それらの機關の自由なる活用によつて初めて兒童の性能は發展して行くのであらう。

方便物の活用。以上の方便物は兒童と教師の共用である。教師が用ふる事もあれば兒童が獨自に用ふる事もある。教師は兒童の獨自的な使用に對して相當の使用法を指導する必要がある。

### 三 問題構成法の指導

吾等の理想とする學習態度 それは兒童が兒童自らを支配し、継続的に努力を続けるの状態をさすと云ふ事は既に述べた。然して其の如き態度を作ることの可能なる所も明になり、歴史科に於ける問題の解決に就て其の基礎となるべき條件も明にした。そしてある學習のプロセスが問題の發見に始まり工夫と努力とを経て解決の満足

にいたる事も既に明になつたのであるが、さきに述べたやうに、問題に對する成功の豫感を抱かしむるためと、作業の能率を高むる爲にここに一つ必要なる事項を論じなくてはならぬ事になつた。それは各教材に對する夫々の研究順序の會得である。換言すれば教材の性質に應じて各特有な問題を發見し構成すべきであるが、其の問題發見上に關する一般的な要件を兒童がのみ込んでゐる事である。既に問題が出來上つた以上、それが解決の方法手段に就ては大して特異な仕方はないが、問題を發見する事に就ては各違つた方法がなりたつ。

人物を主としたる場合 歴史學習上人物が關係せぬ事は恐らくない事と思ふが特にある一人物をとり出して研究する場合、兒童はいかなる方面に着眼して問題を發見し、構成すべきであるか。それは其の人物はいかなる事業をなし、如何なる影響を時代に與えたのであるか。即ちいかなる意味に於て其の時代の代表的人物であるか——代表的人物だから史上に残つてゐるだらうが——其の人の性格は如何と云つた

やうな事を明にすればいいのであるが、それが爲には矢張り其の背景をなす該時代の  
大勢を知る必要もある。それから其の人物の重なる事績の外に、少年時代の逸話や  
半面を表すべき逸話を調べるがよい。それらの事が凡て明になつて來ると、やがて  
結論として彼はかくかくの人物であり、かくかくの性格の人であつたと云ふ事が云は  
れる。そしてそれらが明になつた結果として、其の人物の批判が出来るわけである。  
で、人物の研究に對しては凡そ次の諸點に着眼してゐる事が必要である。

- (一) 何時頃の人か——時代、年代、天皇等——
- (二) どこに生れどこで仕事をしたか、どんな家柄か(場所。系圖)
- (三) 少年時代はどんな人だつたか(生立)
- (四) どんな事業をしたか、何故そんな事をしたらうか
- (五) 其の外に逸話はないか(半面の研究)
- (六) 其の人の仕事(又は人格)が其の時代にどんな影響を興へたか  
(對國家、對社會、對民衆、功罪)
- (七) 若しその人があなかつたら?

(八) 其の人をどう思ふか(批判)

(九) 今日その人があたらどうだらう

(一〇) 一等級に入ったところは、又氣にくはぬ點は

五番目までは大抵教科書の本文に記述されてゐるが、六番目になると少し考へてみ  
なくては分るまい。七以下は皆それぞれ頭から割り出さねばならぬ事ばかりだ。五か  
六位までを當面の問題として構成し、其の解決をすゝむれば好い。七以下は當面の問  
題ではない。研究の結果自然と導き出さるゝ結論である。これは兒童が構成すべき問  
題の着眼點であるが若しもある一人物に就てこれらの問題を教師が提供したら、兒童  
は如何なる解答をなすであらうか、これはやがて其の一人物の事柄を約結して記憶に  
たゝみこむ方法でもあるから、復習等の場合に恣うした問題で試みるも好い一の方法  
である。今著者が試みた一例を示さう。

右の問題を毛利元就について課した場合の兒童の解答

(一) 戦國時代。後奈良天皇の代より正親町天皇の頃(紀元二千二百年代)。

第九章 歴史科學習の態度刷致



- (一) 安藝(今の廣島)。英雄で中國地方の大名。大江匡房の子孫
- (二) 大志を抱いてゐた。なかなかかしくかつた。部下を愛した
- (三) 朝廷の費用を奉つた。
- (四) 嚴島の戦で陶晴賢を亡し主人大内氏の仇を打つた
- (五) 矢をもつて三千を戒めた。
- (六) 賢くて戦がうまいので時の人々が恐れられた
- (七) 陶晴賢が強くなつて、最上の役につき臣民を苦めたかも知れない
- (八) 何しろえらいと思ふ。
- (九) 戦がうまいので参謀になつて戦争が勝であらう
- (一〇) 正親町天皇の御即位の費用をたてまつた事は氣に入つた

しかし陶晴賢を不意に襲つたのは感心しない。

これは或る一生に試みた答だつた。(六)の答などは一寸苦しいが、まづ大體に於て要領を得てゐる。

これは一人物に對する総合的取扱をなす場合で、課の題目を主題として研究をすゝ

める場合の事であるが、毎時間恸うした大きな問題が漠然と提出さるゝ譯のものではない。例へば同じ毛利元就に就て調ぶるにしても前の兒童の解答にもある通り、其の答は頗る抽象的な要項風になるのであるから、部分的な事項を調ぶる爲には更に細かい問題を作らせる必要がある。即ち毛利元就の課では嚴島の戦だけを一時間の教材とするならば、其の場合の問題の作り方は人物中心の場合と違つて事件の場合のそれに従はねばならぬ、(次項参照)、恸うした例は殆んど毎課にあるだらう、(一課が一時間で研究し終へる場合を除いて)即ち下巻第一の織田信長から、豊臣秀吉徳川家康に至る各課の中には何れも様々の事項を含んでゐるのだから、こゝにあげたやうに人物中心で許りは行けないわけだ。其の邊は豫め案を立てる人の注意すべき事だらう。

或る行爲を中心とした場合 即ち人物と云ふ中にも其の人物のある行爲のみをぬき出してそれを研究の對象とする場合は自ら問題構成の着眼點が違つて來るわけである。即ち次の如き方面に着眼する必要がある。

- (一) どう云ふわけでそんな事をしたか(動機)
- (二) その状況はどうだったか(状況或は主人公の心理状態)
- (三) 其の結果はどうなつたか、(結果、形に表はれぬ方面も——主人公の胸中)
- (四) それがどんな影響を時勢に及ぼしたか(時代對國家對社會民衆)
- (五) 其の行爲に對する批判

A 國家の上からみて、B 社會の上からみて、C 其の人一個人の上からは、

恚うわけて述べれば、いろいろに述べらるゝが、歴史は終始一貫した継続的事實であり、殊に一人物に就ての記述内容であつてみれば、前後の關係上大抵それぞれに因果の關係を保つてゐる事が多いから、こゝである人物の行爲として調べた事が次の時間で調ぶる事件の原因と云ふ事になつたりする事は多いものである。それらの點に就ては、総合した立場から教師の方で注意してゐなければなるまい。

**事件を中心とする場合** 行爲と云へば主として或一個の人物の行をさしてゐるが事件は多數の人の關與した行である。

(一)原因

- (二) 状況
- (三) 結果
- (四) 事件の起つた時
- (五) 其の場所
- (六) 之に關係した主要人物
- (七) 國家社會に及ぼした影響
- (八) その事件から當時の世の中の有様や人心の状況を押しはかつてみる事
- (九) 其の頃、自分が生れてゐたらどうするか

**文化を中心として研究する場合** この場合は現行の小學國史によれば至つて少い。

少いが一人物の事蹟中の内譯となると可なりが多い。今、この問題構成の着眼點をあげてみよう。

- (一) どうしてそんな事が生れてきたか
- (二) それらの事にあづかつた人はどんな人々か
- (三) その文化と前世又は後世、のそれとの關係はどうなつてゐるか比較
- (四) それはどんな事實であるか
- (五) それらの事に對してどんな感じをもつか

(六)その時代にどんな關係があるか

以上は國史教授上起つてくる主なる場合を考へてみて、其の問題構成上着眼すべき點の代表ともみるべきものを上げたのであるが、何時いかなる場合もこれに従はねばならぬ事は元よりない。それ以外に必要な問題も構成されやうし、又以上の内でも不必要な事もあらう。とかく兒童はかうしたものを示すとその通りの型にはめこみすぎて、何時の場合でもさうしようとし、あてはめられぬ事でもあてはめて何とか答へようとするからいけぬ。前述賢くて戦がうまいから敵の人が恐れたと云ふやうな答がそれだ。こんな事にならぬやう注意を要する。況んや兒童自らが問題を作ると云ふ事になると必要以外に形式的に問題を作らうとするから一層面白くない。ほんとうに必要な動かされた要求にかられた、問題でなくて駄は目だ。

#### 四 學習態度馴致の外的基礎

ここで外的基礎と云ふのは主として形の上に表はるゝ部面の兒童の態度をさすのである。例へばきゝ方、語り方、見方、やり方、讀み方、書き方等を云ふのである。それらの事を順序よくキチンとやつておく事も亦極めて必要な事であつて初にあげた内部的要件と相まつて是非作りあげておかねばならぬ事柄である。世にはこれらの事をきまりよくやるだけが學習態度の養成と考ふる人もあるがこれは極く卑近な外部的条件にすぎない。

**聞き方** 國史の學習に於てはこのきゝ方が極めて重要な部面を占むる事は、すでに述べた通り、國史上の問題の解決法としては教師の説話によつて情調的解決法が尤も多からである。この場合に於て教師に話術研究の必要な事は既にいふ所である。巧妙な話術があれば、もう大丈夫できゝ方訓練の過半は成功するのであるが、然し兒童の立場に立つて考へてみる事も必要な事であらう。

先づ兒童が根本に於て解決の必要に迫られた問題を有する事である。問題を有し

てゐれば、勢教師の説話に注意する。期待心を以てきけば了解も早く興味も多い。そして又次々に問題を起して行くやうになるものだ。だから憊うした場合彼等の眼は光に輝き一々心にうなづいて聞いて行くだらう。中には思はず腕を腕したり、股をむづむづさせたりするものも出来るわけだ。

さく時の姿勢等に就ては余りやかましく云はぬ方がいゝ。頬杖をつかうが體をのり出してゐやうが、それはかまふ事はない。それを余りやかましく云つて釘つけにでもなつたやうにキチンとしてゐるのが學習態度の好いのだと思ふ思想が可なり日本には強いから困る。要は心の活いてゐるか否かの問題だ。お行儀は第二のものだ。

それから後でかき方の時にも云ふつもりだが、このきゝ方の場合には余り書く事をせぬ方がいゝ。とかく子供は話を一句一句筆記したがるものだがこれは面白くない。殊に情調的解決の場合の筆記は禁物だ。筆記は外の場合も余りやらせぬとも好いやうだ。聞き方と云ふ中にも話すのをきく方と、讀むのをきく方と二通りある。話しをきく

事は割に容易だが讀むのをきくのは一寸難儀だ。學藝會などでも話し方の時はピンと一般が緊張してくるが、讀方の時はすぐ騒ぐものだ。小學校の教育にはも少し聞き方の訓練をやる必要があらう。

他人の話しや讀むのをきく場合は、其の條書をつかむ考でゐなくつてはならぬ。要點を把握する事だ。部分的な枝葉の點だけを覚えてゐて、大要を逸することはありがちの事だ、殊に子供は引例や、此喩のやうな事はばかりを記憶してゐて大要を閉却しやすから特に此の點に注意を要する。それから少しすゝめば他人の言説や、讀まれた事柄を批評的態度を以てきくと云ふ事だ。これも余程必要な事で何處か一つ把えてやらうと考へてかゝれば注意も自らまとまるものである。

語り方 この中には次の如き種類がある、

- (1) 討論
- (2) 對話
- (3) 質問應答
- (4) 相談
- (5) 説明

ある問題に對して代表者が、公開的に意見を交互に述べて論議し合ふ状態が討論で

ある。學習本部及學習後部に於て用ひらるゝ。教師對兒童の代表者、兒童對兒童の二つの場合がある。教師が加はる時は啓蒙的態度になるがよい。歴史會などに之を試みるとなかなか面白い。例へば秀吉と家康と何れが偉いかなど云ふ問題でやらせるも一興だ。然しその本義はむしろある事件の闡明を主とした場合にある事を忘れてはならぬ。

こゝで云ふ對話は主として學習後部又は復習の場合に用ふるものであつて、應用的なものだ。一種の質問應答にすぎない。即ち甲が問を發し乙がそれに答ふるものである。

しかし質問應答は、問題の解決途中に行はるゝ作業で、多くは對教師の場合である。その相談と異るところは相談は一分團或は一個人と教師、又は兒童相互間のそれをさすのであるが、質問應答の正式は教師對兒童でその兒童は級の代表たる、ある一生によつてなされる。従つて他の級生はその作業を休止して之をきく必要がある。此の際

教師は完全に解合せずに兒童に考察の余地を残して行くがよい。

相談はこれ又問題解決前の仕事であつて尤も學習の重要な部面を占むる。教師對兒童、兒童相互などの別もあるが、多くは個別的の性質をおびてゐる。同一分團の兒童相互は尤も親密に相談し合ふべきである。此の際多少教室が喧騒に流るゝは當然の事で止むを得ない。

説明に至つては改めてかきたてる迄もない事だ。ある解決の結果を一般に知らせる意味のものである。

以上語り方はそれぞれ時と場合とを考へ合せて適用を巧にするがよい、相談を除く外の場合は言語明確、意味明瞭たるを要するは云ふ迄もない。喋る事は決して耻ではない。公衆の前で思ふ處を明確に徹底的に語りうることは近代人の缺く可からざる一資格である。教育上その養成に相當の努力あるべきだ。

語り方の指導に就ては先に歴史教授と話術の項で述べた事を参照して貰へばよい。

即ち教師自身話術の修練を必要とすると同時に、同様の事項に就て兒童にも修養させるがよい。重複の煩をさけてこゝでは再論せぬが要するに、語り方の指導には次の三點に注意しなくてはならぬ。

一、語るべき内容の明確な把握

質問せんとする點、説明せんとする事項、論議せんとする内容をはつきりと頭の中にならぬとみこんでおかれなければならぬ。少し長いものになれば草稿體に要項を記して其の順序を定めてかゝる習慣を作らせるがよい。

二、言語の精練

尤も劉切な言語を撰ばしめる。そして其の表現に際して特に明晰に多少抑揚緩急を附する事も必要だ。これらは教師が示範して少し指導すればすぐ出来るやうになる。

三、態度の工夫。

口の使ひ方、姿勢、及び手の動かしかし方等に就て仰山にならぬ程度の工夫をこらしてやる事が必要だ。子供の事であるから余りことさらめいて不自然に見えるのは面白くない。自然に迫られて出るセスキチュアがよい。必要以上の大きな表情は感心しないが、餘り小さな表情でも奏功しない。其の邊の修練はなか／＼むづかしいものであるが早くから注意してあれば教師以上に上達するものだ。

**読み方** 読むことは實は聴く事と同じ性質のものであつて、只だ反復して之を読み

うるだけの便がある爲め、其の意味を把握するにはきつ方よりずつと容易なわけである。が然し讀めない場合や、讀めてもわけの分らぬ場合があるだけが又きつ方より難解だ。

読むことは學習のあらゆる場合に適用され、尤も主要な位置を占むる。理科を初めとして近代は書物の上から得る知識よりも實行に訴へて、實事實物から直接に把へる智識の方を尊重する風が強くなつて來たが、歴史や文學の如きはどうしても讀むなりきくなりしなければ學習の出来るものではない。

讀まるべき資料としては、参考圖書教科書其他文字によつて表現されたすべてのかき物を指すのであるが就中小學校では矢張り教科書が尤も重きをしめてゐることは申す迄もない。教科書は其の如何なる内容の場合でも先づ學習前部に於て一回は必ず精讀さるゝ。次に教材の性質によつて學習本部で讀まれ更に又學習後部で讀まるゝ。然して其の讀み方は其の目的によつて自ら多少の違があるべきだ。問題を發見し構成せん

が爲によむ場合は頭がさう云ふ方面にむいてゐるだらうし、既に解決し得て、或る統一をつくらうとする場合、若くは之によつて更に情調を強めようとする場合とは自ら態度が違つてくる。然して最後の場合の如きは聲を出して或る氣分をそれに伴はせて表情的によむ事もいゝが、前の場合などはなるべく心讀味讀すべきである。

讀み方を指導する上に於て、文字や語句の訓みや意味に泥んでゐては仕方がない。難解なものに對しては全部に假名をつけてもいゝ。難解な術語などは前もつて解釋しておいてもいゝ。(但しその課を研究し終へて初めて其の術語の意味が明になる場合もあるから、その邊は考へておかねばならぬ。例へば院政とか探題とか云ふが如きものがさうである。)讀み方に於ても尤も肝要な點はある目的を以て詠むと云ふ事である。何物かを求め、何物かをつかまんとして讀んで初めて意味がある。讀める讀めないの如きは殆んど問題でない。で初めて之を讀む時から、既に讀んである解決を得ようとの目標を立つべきだ。即ち學習前部の場合では、ある問題を發見し構成せんために讀み、

又其の問題の適當な解決のために讀むもので、學習本部では更に深き程度の問題を解かんがために讀むのである。で常に讀む事と問題とは不即不離の状態にあるべきだ。指導者の注意すべき點はこゝにある。即ち問題をもつて讀むと云ふ點にある。問題なくして讀むは無意義のみだ。

若しも兒童が初めて教材に逢着した時、それが何等問題の形をなしてゐない時であつたならば、兒童は其の教材を讀んで問題をくみ立てなくてはならぬ。で其の第一回目の讀み方に於て兒童は其のまさに讀まんとする所より何物の問題が生じ來るべきか、豫めまづ其の豫想を以て本に望むがいゝ。この豫想を有して讀み、豫想を有してきく事は、大にその作業を意味づけ、讀み又はきく人の態度を眞實ならしむるものだ。其の豫想は出鱈目でも何でもかまはない。

新案讀書法の要訣は、出來得る限り讀者の想像力を逞しうするにある。で先づ標題を見て内容を豫想するを第一着手とする。「例へば鬼の話」とあればどんな事が書いてあるであらう、若し自分が此の題目を課せられて論説を書くとしたらどんな事を書くべきか、筆者は漢學に造詣深い何某教授だから、多分こんな事が論じ

てあらう……などと、讀まない前に出来る丈の豫想を抱いてきて、件の論文「鬼の話」を讀むのだ。徒然草に、

名をきくよりやがて面影はおしはからるゝ心地するを、見る時は又豫て思ひつるままの顔したる人こそなけれ。

とある如く、豫想は外れ勝なものである。何某教授の「鬼」は、或は諸君の豫想に比すれば「佛」の如く優しかつたかも知れない。假令豫想と實際との間に天地の懸隔があるにせよ何等の豫想なしに漫然讀んだ時よりも、隨に深い印象が讀者の腦裡に残る筈である。十人十色の世の中、鬼にも千姿萬態あるべき道理。人の鬼と我が鬼とに、美醜善惡の差あるところ其處に我が師があつて、讀書に得も云へ、約其處が拂くのである。「思考と言語」に就いても「修養の工夫」に就ても略同様の事が云はれる。若し自分が是等の題目で何か書くとしたならば、一體どんな事を書くべきか、と工夫を凝らし、案を立て、而して後徐ろに他人の作を讀んで、萬一自説と合すれば因より快、讀めば讀むほど自説と遠ざかり、讀み了へて自説の愚案を自覺するに至つて愈々快哉を叫ばざるを得ない。

次は讀み残して結論を想像する事である。論文は勿論小説でも講談でも、興味を中心に至つて、故意に巻を覆ふ。巻を覆ふて其次を考へ、やがて結論又は大團圓に及ぶのである。斯くては折角の興を削ぐの嫌あらずやと問ふ人もあらうが事實は正に之に反する。其の證據は、一回毎に一晝夜を待たせる新聞小説が如何に讀者の好奇心を煽るかを見ても分る。當らぬ八卦、當らぬも八卦、應分の豫測を持して一回一回を追ふ時、讀者は

即ちおのづから作家の地位に立つのである。

之を要するに、所謂新案讀書法は終始自我を鋭くし、批判的態度を持して讀書するのであるが、此の方法は講話又は演説等を聴く場合にも應用して効果があると信ずる。従つて兒童に讀書せしめ、又はお伽噺等を聴かせる時などには、宜しく之を利用せられんことを希望す。(國語讀本要義)

**書き方** 習字のことではない。書記による學習をさす。この學習には收得の場合と表現の場合とがある。詳言すれば理解をたすけ記憶を確實にする爲に書記する場合と、(後日の備忘のためにかく場合も含む)自我に同化融合したものを表現することによつて更に理解と記憶と情調とを深刻にするする場合とがある。然して二者又互に兼ね合う事もある。

**表解又は要項の摘記。**例へば教科書なり何なりを讀んで其處に表現された事項をなるべく洩れなく、然も一目瞭然たるやうに綱目體にかき並ぶる事である。次の例をみよ。

**朝鮮征伐** 秀吉は何故朝鮮を征伐しようとしたか  
戦の有様はどうだつたらうか  
結果はどうなつたらうか



### 原因

明が秀吉の修交の求めに應じなかつたから、朝鮮を巡つて明を打たうとしたが彼が従はなかつたから

### 状況

秀吉名古屋から指圖す  
小西加藤を先鋒に十三余萬の大軍出征す、  
我軍京城を陥れ行長は平壤を攻め、  
清正は二王子をとりこにす、  
碧蹄館の戦明軍來り攻む、  
小早川隆景かつ、  
一旦和し再び出征す、  
蔚山鎭城、淺明幸長明軍に圍まる、清正援助  
酒川の戦、明軍二十萬烏津義弘を攻めて却て破る、  
結果秀吉病死し諸將遺言により引きあぐ

大要の抽書。右の例を大要の抽き書きにすれば次の如くなる。

秀吉は明に修交を求めたが明が應じなかつたので、朝鮮を通じて之を攻めようとした。然し朝鮮は明を恐れ従はなかつたので、秀吉自ら肥前の名古屋に出陣し十餘萬の兵を派して之を打たしめた。三月にして殆んど朝鮮を風靡し一旦和したが、後ち再び出征し加藤、小西、淺野、小早川、烏津の諸將各地に戦ふて大に明軍を破つた。然し秀吉の死によつて諸將引き上げた。前後七年を要した。

表解は初め綱目を定めておいて之に従つて書きとつて行くし、要項は研究の歩をすゝむるにつれて其の要點を一々略記して行く、然して大意は全文を讀解し得た上で之を縮約して簡潔に表現するのである。前二者は學習前部及び本部に於て主に用ひらる

が後者は學習後部の作業であらう。

備忘的の添へ書き。これは教師又は級友よりきゝ得た事で、教科書に記されてない事項で必要な事柄をかきとつておく事であるが、主として學習の本部に於てその知解的研究をなす場合に行ふ性質のものである。大抵は個有名詞位をちよい／＼と記入する位であつて、余り長い事かくのではない。又なるべく長い事はかゝぬやうにする方がよい。

説明的の解答。さきの要項又は表解及び大意の抽書など云ふ事も或る意味に於ては矢張りこの解答であるが、特にこゝに一項をあげたのは、前二者が主として自ら構成した問題に對する解答であるに對し、これは他から示された問題に對する解答——換言せば試験の答案の書き方のやうな事をさしてゐるからである。この事は實際上には極めて必要な事であるが余り顧みられてゐない。だから其の筆答の答案など極めて拙く断片的の事しか書けない。故に折々題を設けて此の解答をやらしてみるのがよい。學習

後部及び復習等の場合は活用すべきものだ。

評論及び所感の發表。既に一通り理解的研究も済み、情調の空虚も充たされた後でこの種のことを試みらるゝ。綴方の文題とも云ふべき性質のものだ「譲夷か開港か」など云ふ題で幼稚ながらも其の所懐を述べさしてみることは面白い事だ。綴方と聯絡してやつてもいゝし、歴史會などで試みても好い。學習後部の折に手短なものでも一法だ。

戯曲的表現。教科書又は他の讀物から得た内容を十分に咀嚼し我ものとしたならば之を一種の戯曲に作りかへてみるも面白い事だ。無論彼等にさう深刻なものが、望めるわけではないが練習によつては相當なものをかき上げるものだ。

以上述べたやうに書記による表現にはいろいろの種類があるが、何れも夫々の目的があり、且つ極めて重要な意義を有するから之が指導にも大に心しなければならぬ。然してこれらの指導は主として綴方の傾分に屬するものである。只だ國史としては國

史本來の性質に考へて其の要點を明にしたい。書寫能力の敏活や文字の正確、筆記帳、筆記用具等の問題もあるが皆大したでもないから省く。

行ひ方 即ちこゝでは演じ方だ。すぐ前項にあげた戯曲的な書記表現物を實際に演させる事である。余り度々はやれないが、兒童自らが脚本を作り、之を實演する事になれば國史としては尤も有効なものだ。然しとてもさうした時間がないから學藝會や歴史會等に於て試みたらいいだらう。尙此の事は後で述べる。

これらの諸項は何れも學習の外部的條件とも稱すべきもので、所謂學習態度の養成に就て是非一通り骨折らなくてはならぬ事でもある。よく聞き、よく語り、よく書き、よく讀み、然してよく行ふ事の訓練が出来れば其の外に何も云べき事もない。只だ初にも云つたやうにこれのみが學習態度の全部ではなくこれはむしろ外部的な事柄で其の根本は前に述べた自主繼續の體度そのものである事を忘れてはならぬ。

こゝで著者の學習態度訓練に對する系統を概言する。

- (一) 根本に於て自主的繼續的の體度を養ひ(二)次で歴史學習の(研究の)順序方法を了得し  
(三)學校教育としての諸作業の訓練を経て、こゝに初めて完全な學習態度が養成さるゝ  
と云ふ考である。この一章は即ち其れ等を闡明したつもりである。

## 第十章 教授の實際例

- 情的教材取扱の實際——和氣清麻呂  
○知的教材取扱の實際——條約改正

例は全く例にすぎない。一例を以て全斑を知る事は極めて困難である。本書に實例を添ふるは刺身のつまにも足りない。熱心なる研究者は、各自のこゝろを因にしてその獨創的な實際を建設されたい。その際に此の實例がつまの役でもつとめる事が出来れば幸である。

## 一 情的教材取扱の實例

教材 和氣清麻呂（参考 小學國史 上卷 第十）

### 第一段 學習前部

#### ▲問題の提出（前時の終りに豫示）

さてかくの如く佛教が盛になつて來たがその結果として吾々は我が日本の國史上、實にゆゝしい事件を引き起した事を研究しよう。佛教隆盛の結果として生れ出た事が、何であるかよく次の課を調べておけ。

（此れは明に構成した問題の形を以て兒童に提出した場合である。）

#### ▲問題解決の努力

兒童は教科書を調ぶる事によつて、提供された問題はすぐ解決する事が出来る。事柄が兒童にふさはしいので其の筋書はすぐに了得する。

兒童の構成した問題(想定)

- 1、佛教隆昌の結果名僧が輩出した事——行基はどんな事をしたか
- 2、和氣清麻呂の忠義をつくした事
- 3、和氣廣虫はどんな事をしたか

第二段 學習本部

▲學習結果の表現

○先生が出しておいた問題は解決されたか

(兒童構成問題その一に就て發表)

○この外に問題を作つたか。(構成された他の問題を發表し、その解答をきく)

○兒童の解答に對して相互的に質問應答をやらせる。

▲新問題の發見

漸次教師も加はつて次の如く進行して行く

- 1、すぐれたる僧多く出でたとあるが幾人位出たか、どんな人があつたか
  - 2、行基の開いた道や、堀などが今も残つてゐるだらうか
  - 3、道鏡はどうしてそんなに重く用ひられたらうか
  - 4、どんなに勢をふるつてゐたか
  - 5、道鏡にへつらへるものとは誰か
  - ◎6、それをおきよになつた時の天皇の御心中はどうであつたらう
  - 7、それをきいた時の道鏡の胸中はどうだつたらう
  - 8、一般の人々はどう思つてゐたらう
  - 9、清麻呂は何故道鏡の云ふことをきかなかつたらうか
  - 10、清麻呂が宇佐から歸つてきた時の様子が知りたい
- 凡て恚うした問題は質問應答の結果解決されるものはどんどん解決して行く。又兒童だけで解決が出来ぬことでも例へば(1)、(2)の如き簡單なもの——本問題の主眼でな

いもの——は教師の方でどんどん片づけて行くが好い。一寸人名や地名をあぐればいゝ事だし、又それらの人名や地名や數などをきいた所で、子供はその刹那に解決の満足を得るだけで、これを永久に記憶するものでもなし、又その必要もないものだから。然し(6)以下の問題になるとさうは行かない。とても一言二言では解決されない。當時の人々の心中を伺はんとする事は一つの情的疑問である。大さう喜んでゐた。大さう御心配あらせられた。どうなるだらうと心配してゐたなど、云ふ簡単な事では充足されない。其の状況を精細に描寫することによつて初めて満たさるゝ事である。之を單に知的に解釋するとすれば今のべたやうに、「大さう云々」と云ふやうな抽象的な一言半句で足りる。知解萬能の教授ではこれで足りる。記憶を主とする入學試験や考査ではこれで十分合格する。然し所謂情趣を喚起して國民たる志操を築き上げるにはこれでは足りない。どうしても其所に精細なる直觀的談話の表現によつて情意の躍動をまたねばならぬ。本教材の如きは其の取扱を抜きにすれば殆んど取る所はない。この部

分の取扱の考拙によつて初めて成功不成功を論ずる事が出来る。よし其の結果としてそれが何時頃の出来事であつたか、宇佐八幡がどこにあるか、何と云ふ男がへつらつたのか、どこの國に島流しに合つたかなど云ふやうな知解的の事柄はすっかり忘却したとしても、尙かつ其の効果は甚大なものと云つてよい。

#### ▲新問題解決

さて以上の問題の中で解決されずに残つた事柄に對して、兒童は其の様子がきゝたいと云ふ情的空洞が生じてゐる。これを解決する事は教師の説話が、或は巧に兒童向に表現された戯曲を朗讀するより外に一寸いゝ方法もない。

ではそれらの事に就て少し先生が話してみよう、と云ふ事になつて説話に移るがいゝ。

……自らは大政大臣禪師となり次で法王の位まで授けられ一門のもの五位に叙せらるゝもの十人、其の弟の如きは名もなきものから一飛に従二位大納言に任ぜら

れた。従二位と云へば今の大臣以上だ。それらのものは何の手柄があつたと云ふわけでもなくして此の如くだ。道鏡自らは天子様と同じ様な衣物を着、出かける時は天子様のおかごと同様なものに乗つて行く。まるで天子様になつたやうな心持だ。たべ物などは元より、天子様も及びにならぬ贅澤をつくした。時の人はすべてこれを羨んだ。彼の云ふことをきき、彼のお氣に入るやうにしておればどうだらう？ 若し又彼に反対すれば……？

そこで時の人々は大抵彼の御機嫌をとつてゐた。彼に少しでもよく見られようとするのは人情だ……若し君等がその頃居たとしたらどうだ？

そこに中臣の習宣ユキノブ阿曾麻呂と云ふ男があつた。九州のお宮の事をつかさどつてゐる可なり立派な役の人だ。その人が宇佐八幡のお告げだと云つて或時憊う云ふ事を云つた。知つてゐたらう……さうだ「道鏡をして皇位に……」何故そんな事を云つたのだらう。ほんとうに宇佐八幡のお告げであつたらうか？ (子供の心は縦横に躍る。相

像は頻りに展開される。不都合な奴だと肩をいからず、眼は光る)それをきいた道鏡の心中はどうだつたらう。巧い事を云つてくれた。占めた。愈々ほんとうの天皇になれるんだ。よし、天皇になつてやらう、日本中の天皇に、そして天下を思ふまゝにして……あゝ嬉しいな、愉快だ！愉快だ！天皇になれるぞ、これまでだつて俺は天皇と同じ位だつたが、さてこれから愈々天子様か、何だか思ふと胸がぞくぞくする……(さても憎らしい奴だ。道鏡の喜びを悟るほど兒童は反感をもつて来る。)だが天子様は如何思召しになつたらうか。又となくお愛しなされてゐる道鏡、法王の位までお授けになり、何一つ彼が云ふ事をおききにならぬ事はない。その道鏡の事だ。天子様は何とお考へになつたらうか、自分の誰よりも一番すきな、そして一番高い位にゐる道鏡の爲に位をお譲りにならうとはお思ひにならなかつたらうか。(これは可なりむづかしい問題であり且つ尤も大切な處である。彼等の頭は可なり混乱してくるだらう)

いかほど御寵愛になつてゐた道鏡と雖もこればかりは出来ない。そんな事が出来るものか、道鏡は河内の片田舎に生れ出た一僧侶だ、苟も「豊葦原の瑞穂の國は汝か子孫の王たるべき地なり」と仰せられた御神勅は、この時も尙ちやんとてり輝いて人々の心にもはつきりとほりつけられてゐた。流石の天子様もお迷ひになつた。神様の仰せである！あゝ神様の仰せ！さて不思議な事を神様も仰せになつたものだ。ほんとうかしら？怪しい！よし神様の仰せでも、こればかりはとお思ひになつたに違いない。

このことが世の中に傳つたときその時の一般の人々はどう思つたらう。君等だつたら！さう今でこそすぐそんな風に思ふだらうがその頃の人々たちは……人々も迷つた。然し馬鹿な事を云ふなと心に怒つたものも澤山あつた。

さて愈々清麻呂が行く事になつた。清麻呂は皇居を守る近衛の役をつとめてゐたが平素から天皇の御親任厚かつた人だ。彼が天皇から宇佐行の命を拜した時の胸中

も亦諸君の考へてみななければならぬ事だ、誠にこれは重大な役目である。清麻呂の一言で事はきまる。たゞ一言で。「八幡様は左様お告になりました」と云つて了へばそれですむことになる。吾々は道鏡を天子様と仰がねばならぬ事になる。清麻呂は一人心中の中に決心した。何と決心したらう。

今のやうに汽車や汽船の便はない。九州のはてまで行くには随分困難な旅をしなければならぬ。清麻呂はその大任をおびて淋しい旅に立つた。ふと道ばたに道鏡がやさしい顔をして表はれて來た。

「やあ、遠方へほんとにご苦勞だ。旅の仕度はすつかりできたか」  
彼は言葉もやさしく話しかけた。そして何かといははつた。清麻呂の心はびくともしない。

「時に清麻呂、こんどの事よくよく考へて貰はねばならん。俺はお前を信用する。屹度お前を大臣にしてあげよう。大臣にだ。いゝか。お前を大臣にしてあげ



るから……………」

近衛の役から一とびに大臣になる。一國の大臣、臣民としてはもうこれより上はない、自分の口一つで大臣となれる。いゝな大臣！どうだ君たちは大臣になりたくはないか。

「いゝか、分つたか、ねえ清麻呂。若しまちがつたら！」

さう云つてぐつと睨んだ道鏡の眼は火のやうに光つてゐた。

然し清麻呂の心はびくともしない。淋しい旅も無事にすんだ。元より神様がそんな事をお告げになるわけではない。

清麻呂が歸つたと云ふ噂が都に擴つた。人々はとりどりに噂した。よるとさはると其の噂でもちさり。

「どうだらうな！八幡様は何と仰つたらうか？」

「八幡様が何とお仰らうと、世は道鏡様のものだ！」

「馬鹿そんな事があるもんか？」

さて又天子様はどうだらう。八幡様のお告いかにとおまらになつたお心の中は？それよりも道鏡の心中はどうだつたらう。今か今かと其の運命の決せらるゝ時をまちあぐんだに違いない。

愈清麻呂は参内した。天子様は簾の中から、お告いかにとまたせらるゝ。道鏡はお側に居つてどつきどつきさはぐ胸を抑へながら、清麻呂をみつめる。多くのけらいたちも次の室で様子如何にと！、この押迫つた場面をみんなは十分相像すること出来るか、三人三様の心の中を！さて清麻呂はしづかに口を開いた。彼の言葉はさはやかだつた。何と申上げたか、一しよに云つてみよ。(一同はつとすると。これでもうよろしい)

この圖は清麻呂が今言上したところ。道鏡の顔をみよ。この後清麻呂がどうなつたか、又道鏡がどうなつたかは、みんなが十分知つてゐる筈だ。清麻呂のやうな人は

珍らし(50)

(この時限はこれで終るがい)。神韻深渺たる境地で、うつとりなつて外に出ればい(50)。

### 第三段 學習本部

#### ▲情調の復現

前回の説話によつて喚起された情調を復現すべく教科書をよませる。

#### ▲次に次の問答により思想を整理す

清麻呂は何故道鏡の云ふ事をきかなかつたか……(忠義の心が深い)  
忠義とは何か

道鏡は何故忠義をつくさなかつたらうか

平素はどうすれば忠義になるか

出世する事は忠義ではないか、(道ならぬ事をして榮達しても駄目)

邪は正 なたうと云ふ事を云ふが、この話でそれが分るか、(清麻呂の召還に道鏡の  
貶滴を語る)

吾々は清麻呂をしたふ。我國民はすべて清麻呂を尊んでゐる。その事實は京都の護  
王神社(寫真及びかけ圖)に祭られ又、十圓紙幣(實物提示)にその肖像がのせてある  
のでも分る。清麻呂は永久に國の護りだ。

#### ▲戯曲的表現の試み

今日は一つ和氣清麻呂の題材でドラマを作つてみよう。どの場合をとつたが一等よ  
いか、少し考へてみよう。

I、習宜の阿曾麻呂が八幡の御告を申上げる場合

2、清麻呂が宇佐に出發せんとする場合

3、清麻呂が宇佐八幡の御告を申上ぐる場合

等があげらるゝ。其の内どれがいゝか。適當に決定(こゝでは3の場合を作る)場

面はきまつた。登場人物は誰々か。舞臺面の装置背景等は如何にするか。どんな會話をさせるか等一々相談して進行。凡そ次の如きものを合作する。

戯曲 和氣公の誠忠 (一幕)

時 奈良朝時代

登場人物 和氣清麻呂  
僧 道鏡

近侍の者數名

舞 近侍の者數名、不安の面地して私語せる處に幕上る。

清麻呂衣冠束帯にて登場、旅の疲れにてヤ々やせてみえる

近侍一 「やあ、和氣様、定めしお疲れで御座いましたでせう」

近侍二 「御遠路誠にお察し申します」

近侍三 「大變おまち申して居りました。御無事で誠に安心いたしました」

清麻呂 忝しく一禮しながら「皆様、有り難う存じます。いろいろと御心配をかけまして」

近侍一 「陛下もおまち遊してお出になります」

近侍二 「あう、道鏡様もお見えになつていらつしやいます」

清麻呂軽く會釋しながら、静かに歩み出す、と

近侍三 清麻呂の近くに進みよつて「お上を初め一同のものも大へん心配をいたしてゐまよ」

清麻呂じつと一同を見まはして、うなづきながら決然と襖を開いてひれ伏す。

静かに舞臺廻りて玉座正面に表はれ、簾の中にかすかに陛下の御衣ちらつく。道鏡衣をつけ側近く侍り、ざろりと清麻呂をみる。

襖の外では近侍の者頻りとさゞめき合ふ。

近侍一 「和氣様は世にも稀な誠忠のお方であるが……」

近侍三 「ならば、さうでもあの道鏡様の御威勢では思ふ事も云へまい」

近侍三

「それに、すぐおそばにいらまへてお出でだからなあ」

近侍一同

「さて、何となるものかなあ！」

簾の中からおん聲ほがらかに「清麻呂御苦勞であつた」と仰せらるゝ。

清麻呂僅かに頭を上げる。續いて御聲

「神の御告げは！」

道鏡きつと、清麻呂をみつめる。

清麻呂

「畏みて宇住八幡のお告げを申し上げ奉ります。(間)。

「わが國は國の初より君と臣との別、明かに定まれり。決して臣を以て君とすることなし。無道のもの(聲一きはほがらかに)早く之を除くべし」と神はお告になりました」

申し終りて清麻呂更にひれ伏す。

道鏡

「下れ、下れ、清麻呂つ」

襖の外では近侍たち耳をそばだて、顔見合せる。

清麻呂落ちつき拂つて退く。道鏡立ち上つて齒ざしりしつゝ、「うぬ」と後を睨む。しづかに幕

## 二 知的教材取扱の實例

教材 條約改正(参考 小學國史下卷五十一 明治天皇五)

### 第一段 學習前部

△此の次には條約改正に就て研究するから、好い問題を見付けておけ(前時間の終りに豫告す)

△兒童が構成した問題(想定)

○何故條約を改正したか

○どんな風に條約を改正したか

○何時、どこで誰が改正したか

改正の結果我國にどんな影響があつたか

○領事とは何か

○陸奥宗光とはどんな人か

児童は家庭に於て（又は自由學習の時間に於て）以上の問題を構成する。そして自分の力を以つてそれ相當の解釋をつけてゐる。若しそれだけの作業が其の時間以前に出来なかつた場合は、其の時限の劈頭に問題を構成させる。教科書を一讀過する事によつて彼等は凡て如上の問題を作る。

△以上の問題を解決するため、學校圖書館及博物館は次の如きものを豫め準備しおくを要す。（勿論教師はそれらの事項に就て精査しておくべし）

一、世界地圖

一、改正前の條約文又はその内容を示すもの。

一、改正前の貿易狀況（關稅等に就て）

一、領事裁判の實例（新聞雜誌又は書籍）

一、條約改正に關する輿論沸騰の狀況を記せる當時の新聞又は書籍

一、大隈重信。陸奥宗光等の肖像

一、人名辭書

## 第二段 學習本部

### ▲研究結果の發表

○どうだ。いゝ問題が出来たらう。みんな發表してみ給え。

児童は前記の問題を口答にて發表する。（或は半紙四分の一大のものに問題だけをかゝせて前以つて提出させておいても好い。其の場合はこの第一歩の作業を省くわけだ。）

○よろしい。随分いゝ問題が出来た。それに就て夫々解決した處を語れ。

児童は口答を以て語り、或は書いたものを讀む。

○その解答に對して児童は相互に批評論議を初む。

▲新問題の發見

○教師もその論議に加つて、だんだんと彼等の解答を追窮して、遂に第二項の問題として次の如きものを構成す。

- (1) その頃の條約は何時頃どうして出來たものか
- (2) 我國の面目を損じ利益を害したと云ふがどんな事があつたか
- (3) 領事裁判は何故悪いか
- (4) 輸入品に税を課するとはどうする事か、それがどうして不利益か
- (5) しばしば諸外國と談判したと云ふが何時したのか
- (6) 一帯どうしてそんな條約を結んだものだらう
- (7) 法律や制度が整ふと何故外國は改正に同意するだらう

即ち第一項の問題は一通り本を讀解して構成されたもので頗る平面的な簡單なものであつたが、此度のはいくらか教科書を讀解しても一寸解決されない問題が多い。そこで児童は更に新しい努力を始める事になる。

その努力は分團本位の相互研究である。勿論教師は机間を巡視して各分團の相談に應ずる。問題(1)は前の五十課を少し研究すれば分る(3)(4)(6)(7)は教師の談片的示唆的解答によつて頭のいゝ子は大抵解決する。即ち(3)は領事裁判の意味が分ればすぐに分る事だし、(4)は輸入税の意味が説明されるれば直に納得が行く、又(6)と(7)とは落ちついて考へれば分る事だ。

たゞ(2)と(5)とは少しく事實を語らねば分らぬ事である。若し當時の新聞や雑誌のやうなものがあれば、それを児童に調べさせると大抵は解決がつくが、それらも一寸得られまいから。これはこの場合全級のものの疑問として残るであらう。この疑問の解決は教師の説明にまつ外はない。で教師は大體に於て次の如き要點に就て話す必要が

ある。然してこの(2)問と(5)問とがやがて本教材の尤も重要な問題である。(此の場合の説話は知解に重きをおくのであるが事實が事實だけに感情的になるものた)  
(2)に對しては

○税率が五分であつた事、

○英國人の阿片密輸入事件に對する領事裁判の不當

○ノルマントル號事件

(5)に對しては

1 岩倉具視一行締盟國遊歴——改正の豫備交渉が目的(四年)

2 井上外務卿の盡力——歐洲心醉時代の出現

3 大隈重信の盡力と遭難

4 青木外相の盡力と交渉

歴代外相の苦心と民論の沸騰

等に就て極く大體を手短に話し、殊に大隈の遭難などは子供にもよく了解され、その

事實を正しく解釋させる事が出来るだらう。

### 第三段 學習後部

▲要項作製(想定)

一、從來の條約——(1)領事裁判の不面目(2)輸入税のやすい事……不利益

二、改正 右の二つをのぞく

三、成立 二十七八年役の前、英國後に諸外國同意(陸奥外相の時)三十

二年より實行

▲教師及兒童の所感發表

大正十年の華府會議に於て英米と並びて三大國の一と數へらるゝ至つた我國の現状よりひるがつて當時を追憶するがいゝ。改正のために國民の熱騰した事をやゝ詳細に物語つてやれば本課の情的取扱は十分に到達せらるゝ。改正が成功せなかつたのは一に我國文化の幼稚であつた事にとき及び、文化の進歩がすべて國力の發展をたすける

事に結ぶべきだ。

## 第十一章 編纂者の意見に依る小學國史の活用

- 編纂の方針と取扱上の注意
- 教科書の解剖
- 文化史的にみた小學國史
- 歴史趣味の養成



編纂趣旨の鋭利なるメスを以て、尋常小學國史を知的に情的に、思ふがまゝの解剖を試みた。そこにかくされた幾多の收穫があつた。この收穫物を教壇に運んで巧に料理するこれまさに實際家の重大任務である。知情兼備へしめんと欲する編者の深き用意と、特に文化開展の上よりみたる著者の見解とを、こゝに併せて語つた。

尋常小學國史が如何なる趣旨方針の下に編纂されたものであるか、然して之が取扱上いかなる注意を要すべきかは、實際教授者の何人も興り知んと欲する所である。此れ國定教科書であつて、何人も本書を使用しなければならぬし、之を使用する以上、よりよく之を活用するの道を講じなくてはならぬからである。編れたる教科書そのものに多少の批難や缺陷はあるかも知れない。缺陷あればある程實際家は特に編纂者の意見によつて、之を補ふ必要がある。今左に編纂の實衝にあたられた藤岡監修官の意見を採録して参考としよう。

### 一 編纂方針と取扱上の注意

第一 國定小學國史下巻編纂の方針 下巻の編纂方針も上巻と同様である。即ち普通教育と云ふ見地に立ち各時代より其の代表的人物を取り出し來りて、其の人物を中心とし之によつて社會の變遷と國家發展の事象を知らしめんとするのである。然し乍ら社會の事象が複雑であつて或る一人を以て之を代表せしむることが到底不可能な場合がある。例へば攘夷開港の問題や幕末の複雑な現象の如きがそれである。かく到底ある一人

物を以て其の時代の状況を明瞭にする事が出来ぬ場合は、必ずしも或る一個人を以て之を解かうとはせず、標題が示すやうに攘夷開港など云ふやうな題目を擇んだ。然しながらその中に於て亦その事件に就て活躍した處の人物を以て事象を説明するやうにして、よく兒童に了解せしめようと試みてある。

下の巻は第四七八、攘夷と開港第五十武家政治の終りを除けば全部人物を以て其の題目としてある。所謂人物中心主義であるが、只だ右の三課だけがさうなつてゐない。これは今述べたやうにとつても一人物を以てしてはその時代の事象が表現しきれないからである。然しその取扱に於てはなるべく人物中心としてやりたいの考を以て編まれてゐるものである。

尙今一つは明治大正時代の事實である。これは現代のことであるから詳細に之を知らする必要がある。故に國家社會の重大事件を七八の項目に従つてあげてあるのであるが、それら國運發展の事實は何れも皆明治大常や、今上陛下の御盛徳によるものであるから、その御盛徳を仰がしめるやうな方針になつてゐる。即ち明治天皇今上天皇の二課に包括せられてゐる次第である。以上は主として尋常小學國史が人物中心となつてゐると云ふ事を明にしたものである。

さて右の様な具合に歴史は人物中心と云ふけれどもその人物によつて社會を知らせると云ふのであるからして、人物個々の傳を別々に話すのではなくて、要するに文化を人物によつて知らせんとするものである。これが歴史の人物中心主義である。故に之化に關する總ての事件即ち政治經濟及びその他の文化に關する教材は悉く之の教科書の如き簡單なもの、中にも總てを含んでゐる。とは云へ元來が兒童本位であつて兒童の心理に適

切に了解の出来る教材をとらねばならぬのであるから政治に關する教材も其の政治の精神は解いても其の組織は書いてない。即ち江戸幕府がどう云ふ精神によつて初つたかと云ふ事は簡單ながらもべられてゐるが其の政府の組織に就ては何等言及してない。これ尋常科の兒童にとつては聊か了解が困難であると考へたからである。

又經濟に關する事は時代的に一々變遷をとく事は出来ぬが、上巻に比べると大分經濟的記事が多くなつてゐる。例へば新井白石の貨幣改鑄、松平定信時代の米騒動條約改正の項に於ける關稅の記事の如きがそれである。これらの断片的な事實も教授者の取扱によつては十分活きてゐる事と思ふ。

其の他の文化的教材も何々時代の文化と云ふ風に時代時代に一時代を中心として教へるやうにはなつてゐないが断片的に宗教、學問、美術、風俗等云ふやうな文化關係の教材が入れてゐるのである。殊に現代になると社會の進運上からしてどうしてもそんな教材が多いからして、教授者は彼様な諸種の教材を巧に利用して貰いたいと思ふ。

### 史實の教授

尋常小學國史下巻は丁度戰國時代の後を受けて、織田信長、豊臣秀吉の統一即ち近世史の編纂に出發して、徳川時代三百年の太平をのべ、時勢の變遷は遂に維新の大業を出現した事に及び、かくて明治大正の現代に移つてゐる。この時代は國民として尤も知つてゐなければならぬ處の時機であるから——大古即ち開國の當時と近代とは國史上尤も重要な時代である——此の點を大に考へてゐてほしいと思ふ。此の時代は非常に複雑になつてゐるから特に兒童本位を以て教科書を作る以上は、その史實を授けるにも兒童に了解の

出来る位に書物も作り、教授も進行すべきである。

故にまづ第一に文章字句を此の時機の兒童に適するやう平易にし、次には兒童に困難な教材であつて然も餘り主要でないものはなるべく之を減殺する事としてゐる。第三にその代りにその採擇した教材はなるべく詳しく記述されてゐる。従つて教授者は興味ある説話等によつて兒童の感興を引き起して教授をするやうにしたい。第四には同様な理由で記事は具體的にし、動的の挿繪を多くし、歴史地圖や系圖を要所々に挿入して、以て兒童の印象感銘を深からしめるやうになつてゐる。故に之をよく利用すべきである。殊に挿繪は時代が適んであるだけ上巻よりは意味のあるものが多いからして、教授者の方はよくそれを研究して巧に利用すべきである。又第五には御歴代表、紀元年数、略年表などで年代觀念を興へるやうになつてゐるのであるが此度の御歴代表は上巻に含まれた部分の、これも同願させる必要があるから、神武天皇から今上天皇までのせてある。紀元年数は織田氏から明治前までに僅に入つただけ出してある許りである。略年表は幕末までは上巻と同じくしてあるが明治大正の現代となると單に年のみでなく月を示し、場合によつては日までも出してある。これは例へば憲法發布記念日等の如く特に必要なものがあるからである。それを皆一々記憶せよと云ふのではない。只だ各課教授の際この年表をとり出して事件の推移を知らせる事にすればよい。此等の點は聊か上巻とその趣を異にしてゐる點である。

### 人格陶冶

人格陶冶と云ふ事は何れの學科に於ても努力すべき事であり、歴史は特に人格陶冶に資すべき教科であるからの歴史の體系を破らぬ範圍に於て、なるべく訓育資料を多く入れて、その史實を教へる間に

道徳教育をなすべきである。勿論修身科のやうに人間として必ず備へなければならぬ徳目のすべてを悉く教へよと云ふ事は歴史では少しも入らぬ事である。歴史は歴史の事實を教授する間に自然と訓育をやつて行けばよい。徳目を追ふて教材を採擇する事などは決してない。けれどもその教へる事實に對しては、大きな背景があつて話すのであるから訓育としては修身より却て力強い事がある——修身科ではその背景をもたせる事が困難で、徹底的にやれない事が多い。即ち史上のある人物をその教材にもつて來ても前後の關係もなく、その時代ともかけ離れて、只だぼつんと提出するのであるからどうしても力が乏しい——

殊に下巻は現代の事であるから社會が今までよりは餘程進歩してゐる。従つて史上の人物に就て個人の修養上に關する事も、又他人に對する道徳でも大分進んだものか教へらるゝ。殊に現在になると餘程世界的になつてゐるから公徳とか社會奉仕とか云ふ方面の道徳が餘程出てくる。従つて尋五の兒童より高尚になり、尋六に適するやうになつてゐる。之れ社會の進歩を教へる事は歴史科の自然に出来る事であつて此の點歴史の面白い處である。

其の個人を表すにも幼時の逸話から起つてきて、その話が歴史の舞臺の活動に對照するやうになつてゐる。例へば徳川家康の課に「此の鳥よく他の鳥の鳴きまはすれども、己れの鳴聲とはなし。」云々と云ふ逸話が出してあるが、これは彼が後年幕府を組織するに當り、從來の例をふまずして模範的な封建政治の型を創造したのと相照應して考ふべきである。かくの如くやつて行けば、その人物を活動させると同時にその逸話がやがて兒童の年令に適切な教訓になり、一方史實の活躍となるものである。此の外に是非善惡の褒貶を加へて兒童

に適切な批判をやり、又和歌や人情美を養ふ事が出来る資料を入れて情操教授のたすけともしてあるからして  
兒童の理性と感情の教育と相並んで進めるやう努力してほしいものである。

### 国民性格の養成

國史の尤も重要な任務の一である國體觀念を養ふて國民性格を作ると云ふ事は、下巻に於ても大に努力してゐる。まづ戰國時代の幕府が實力を失つてから、朝廷と國民との間の直接接近が初つた。その形勢が接續して愈々下巻になると信長、秀吉の時になつてその事實が著しく表はれて来る。然し徳川家康が再び幕府政治を初めてからその形勢再轉してきた。その間の公幕關係はどうであつたかと云ふに、それをとく爲に後光明天皇の二課が設けてある。此の二課の取扱によつて遺般の消息が明にされる。この課があつて初めて勤王と云ふ事が分つて来る。即ち本課は公幕關係を明にせんが爲に設けたものである。次の二課徳川光圀では儒學の尊王が起つて起る由來を明にし、本居宣長の課では國學の勤王論をといへる。此の國儒兩學者の勤王論からして勤王家が輩出する。その來歴は四十六課の高山彦九郎と蒲生君平の處で表はされてゐる。その時に偶々外交問題が起つてきてそれが勤王論と結びつくと云ふ事が四十七、四十八の二課攘夷と開港の所でとかれ  
てゐる。その大勢と云ふものからして愈々孝明天皇の英邁を以て王政復古の端をお作りになつた事がとかれ、それが明治大帝になつて武家政治が終る。その事が又五十課に詳述されてゐる。それらの顛末を極く平易に兒童に分るやうにとく事が尤も大切な事である。

かくて五個條の御誓文からして總ての明治政治が行はれる。國運進展の事象を一々五個條の御誓文と對照して説くべきである。明治天皇の章下にとかれた八項目の事柄は悉く五個條の御誓文で行くべきである。これを御誓文に引き離してといへば駄目である。就中憲法政治の出來した事に就ては全力をつくして説明すべきである。續いて大正の御代になつて國運愈々發展して現在の世界に於ける日本の位置を述べて國民の自覺を促すと云ふ事が此度の下巻の大眼目である。

右の如く大勢をとく事によつて國體の觀念を養ふ事が出来るが此の間に於て此の歴代の天皇の御仁徳と國民忠誠の事實を上下方面からといへ行くやうにする。殊に此の下巻の近世時代は大體太平の時代であるから決して戰爭のみでなくて平時の忠誠愛國をとく處の資料が多い。それに尤もふさはしい時代だ。然してかやうな君臣同體と云ふもの畢竟一國一家と云ふ國體の特色から自然と發生したものであると云ふその特色を十分に明に  
ならしめ、現代吾々は尤もよく此の國體をわきまへて然して現代社會の爲に盡すと云ふ國民の性格を拵へるの  
が尤も肝要な點である。さう云ふ自覺を與へるやうにしてあるからして實際教育家の熱誠によつて之を仕上げると云ふ事を切望する次第である。(雜誌小學校による。)

## 二 教科書の解剖

之によつてみれば、改訂小學國史が特に注意してゐる點は左の如くなる。

- 一、人物中心主義をとれる事
- 二、文化史は之を輕んじてゐるのではない。人物を通して文化を知らしむる方法を

とつたものである。従つて人物の事蹟を記述する間に斷片的にあらゆる文化的の事象が叙べられいゝる。

三、史實の教授に便する爲に教科書は左の點に留意してゐる。

イ、記述を平易にし具體的にする。

ロ、教材を精選し兒童に適合せしめる。

ハ、採擇したものは之を詳述して感興を多くする。

ニ、動的挿繪、歴史地圖、系圖等の挿入。

ホ、御歴代表、略年表、紀元年數の添加。

四、人陶格治上に注意する所が多い。

五、人物の幼年時代に於ける逸話等は、その人物の將來の活動と聯關せしめて考へてある。又努めて幼年時代の事を出してあるから之を兒童の現況と引比べて味はするがよい。

密接なる君臣の關係を詳述し所謂國民たる志操の養成に努めてゐる。

知的方面 (一)に對しては藤岡民の說話で既につきてゐると思ふ。(二)に就ては少しく著者の考を附加したい。別項文化史的にみた尋常小學國史を参照されたい。三は史實の教授——換言すれば知解的取扱上注意すべき點を述べられたもので各項共教科書を一讀すれば直ちに之を了得する事が出来る。が参考の爲に其の一二の例をあげてみよう。

平易具體的に記述された實例。

○幾千とも知れぬ軍船、いづれも家々の紋つきたる幕うちまはし、思ひくの旗おし立て、威勢の程いはん方なし(二六一—二七頁)

○吉宗すなはち儉約の令を下し、自ら綿服を着け、金銀をちりばめたる城門等をこぼたしめて、手本を示し又しばしば鷹狩云々(五九頁)

○定信大いに意を海防に用ひ、自ら股川草鞋がけにて、けはしき山谷をこえ宿なき

ところにては野宿などし數多の困難を忍びて云々(六五頁)

恁んな例を拾つてみたら幾らもあるであらう。其の他全體の文章が平易になり兒童の獨目學習にふさはしくなつてゐる事は云ふ迄もない。

教材が精選されてゐる事に就て一例をあぐれば、從來は豊臣秀吉の雄圖を語る爲に臺灣やフィリッピンに遣使を遣した事が記されてあつたが、此度はそれらが省略され、その代りに朝鮮征伐に就ては思ひ切つて詳述してある。蔚山の籠城、碧蹄館の戦などたしかに兒童の血をわきたしめる事であらう。

次に七葉の歴史地圖を挿入されたのは上巻と相まつて大に人物活動の場所を明にして結構であるが、之が取扱には地理科と聯絡すると共に、此の部分的な白地圖をして生命あらしむる爲には別に完全な大地圖の備附を要すると思ふ。尙又諸氏の系圖を所々に挿入された事も一目すれば直に分る事であるが、これもタイムと云ふ事を重すんる歴史としては當然の事である。

挿繪の説明 挿繪に新に加へられたもの二十數葉の多きに及んでゐる。然してその多くは動的の挿繪であり、兒童の喜ぶやうなものである。

序に挿繪に就て藤岡氏からきゝ得た點を簡単に述べておこう。挿繪の意味は尤も子供がきゝたがるものであり、然も教師は仲々説明に困しむものであるから多少の參考になると思ふ。

織田信長が馬を走らせて桶狭間に向ふ圖は、信長が熱田の源太夫社の邊にて馬を止め、遙かに東天鷲津、丸根の陥落するを望む所の圖である。社は源太夫社(今日熱田の町の中にある)二三騎後から追ひ來る所など其の時の光景がよく憶ひ出される圖である。

五頁の信長正親町天皇の勅を拜する圖は、場所は岐阜城内、烏帽直衣で上席に坐つてゐるのは立入宗繼で、肩衣をつけて勅書をいたゞいてゐるのが信長である。宗繼を天皇と思つてはいけない。

聚樂第行幸之圖は佐野伯爵家に傳つてゐる屏風を基としてかゝれしものゝ由、風箏まさに聚樂第に入らんとする所、風箏の前には樂人が居る。風箏の後にゐるは左大臣信濃先頭は左近の大將、右近の大將。

十六頁の秀吉が軍船を望む圖は文中の「十三萬餘の大軍海を渡りしが、幾千とも知れぬ軍船いづれも家々の紋つきたる幕うちまはし思ひくの旗おし立て、威勢のほどいはん方なし。」の所に照應するものである。序に名古屋の古は従前は護とかゝれてゐたが古と改められた。それは現名によつたものであるさうだ。

二十二頁の家歴の學問をする所は静岡の大龍山臨濟寺に赴いて雪齋長老から學問をうけてゐる所である。雪齋は大原和尚ともいふ。今川氏の軍師であるから、中々いかめしい顔をしてゐる。

三十頁、三十一頁の大阪陣の繪は左は黒田侯爵家にある屏風をうつされしものゝ右の戦は最上家の屏風を基として描かれしものゝ由、夏陣であるから裡體の人も居

る。恐らく寫であらう。武器に鐵砲を使へる點に注意せよ。

三十三頁の家光が諸侯を試みる繪は、本文と對照すれば分る。集つてゐる大名は外様、一人前に進んだのは伊達政宗大に臣従の道を答へてゐる所であらう。

四十四頁の徳川光圀が大日本史を著す所は、現今の西山の別荘の實景を以てせられたもの。西山の別荘は茨城縣太田町の西十餘町の所にある。質素なもので、この書齋は三疊敷である。當時の建物は一度火災にかゝつて焼失したが其の後もとの位置にもとの通りに建てたものである。尙丸窓の前の梅は光圀當時からのものであるといふことだ。

五十頁の義士引上げの圖は、編者が最も信すべき資料によつて畫工にかゝしめられしものゝ由、橋は兩國橋、先頭より、大石良雄、原惣右衛門、堀部安兵衛、次は富森助右衛門が負傷したる大高源吾を扶けて行く所、次が大石主税。

五十四、五十五頁の朝鮮使者の行列圖は、前教科書と同じで秋元子爵家の藏品より

とたつものである。

五十八頁の馬術稽古の圖は、幕府の馬術師であつた安達氏の家に傳はるものが原圖である由。馬上の蘭人はケーズル、竹橋御門の外で稽古をしたといふことである。

六十五頁の定信海岸巡視の圖は、定信が險阻の土地を巡遊してゐる所をあらはしたもの、當時定信に隨行せし森山某氏の書翰によつて修正されしものだ。

六十八頁の本居宣長の書齋の圖は、現今伊勢國松坂なる鈴谷翁遺蹟保存會にて保存せられてゐる。宣長の住居中の書齋である。柱掛にかけたるは翁愛玩の鈴である。書齋は四疊半、この小さき室から氏の大思想が生れた事に注意。尙床のかけものは宣長の自畫自賛のもの、本文の敷島の歌と照應してゐる。これは一に編者の創意によつたもののお話。

七十二頁の挿畫は彦九郎の京日記によりてかゝれしもの、御所の本門にて禮拜する所、御所は現在のそれと同じ。

七十四頁の蒲生君平が順徳上皇の御陵に詣でる所は、君平の上半身の圖があつたからそれによつて相像的にかゝれたものだ。御陵は寫眞を基としてかゝれしもの。今日は立派な玉垣が出来てゐる。繪葉書か何かとりよせて比較したら面白いだらう。

七十九頁の大砲を鑄る圖は、茨城縣の湊に設けたものを水戸藩史料によつてかゝれたものだ。當時既に煉瓦を用ひた事に注意。

八十二頁、八十三頁のペリー來航の圖は、井伊家にある實寫圖によつてかゝれしものだ。左方の陣屋様のは浦賀奉行の國書をうける所である。

八十八頁、八十九頁の井伊直弼登城の圖は、向つて左の方に見えるのが井伊家の正門で、こゝは今參謀本部となつてゐる。正門は將軍御成の時にのみ用ひるので、平常の通路はもつと左方にある。其の所から行列が今出掛けて來た所。行列は二列になつて、其の中に輿をはさむで行く。櫻田門の手前と井伊家の門前にある建物は辻番所。浪士はまだあらはれてゐない。



九十一頁の三條實美勅命を將軍家茂に傳ふる圖は、幕府の西の丸の三の圓である。以前勅使下向の時は將軍は圖中左方上段の御張臺に坐し、勅使は下座より膝行し、勅書を渡したものであつたが、此の時の勅使から、勅使上座に坐り、將軍は遙か下座につくことになつた。勅使は三條公と姉小路公であり、敷居越しに手をつかへてゐるが家茂である。朝幕關係を表はすに、材料である。活用を要する、尙壯大な座敷に注意せよ。

九十五頁の孝明天皇の御尊影は、小山正太郎氏の筆で福羽子爵邸にあるもの。

九十八頁、九十九頁の征討大將軍進軍の圖は戊辰繪卷物より採擇せられたもので、今大將軍が淀橋を過ぎられんとする所。先頭に錦の御旗あり、圖中松の右手にあらせられるのが小松宮彰仁親王で、其の前の二人の騎馬して烏帽子をかぶれるは旗奉行。此の畫は一面今日の軍服にうつる過渡期の説明材料ともなる。大砲に注意せよ。

一〇六頁の明治天皇農事を見給ふ圖は、尾張の徳川家にある思出草より選擇せられたもので、明治天皇熱田に御駐輦の時、農事收穫の有様を御覽に供へたのである。尾張

公の申出によつたものだ。

一二〇頁の明治天皇大本營を廣島に進めたまふ圖は、博物館にある奉公偉績中にあ  
る寫生畫を基として描かれしものである。

一二三頁の能久親王の圖は、近衛師團の寫真班で撮影したもので、臺灣の澳底に露  
營せられる所。

一二三頁大山大將以下奉天入城の圖は、當時の寫真である。前から三人目が大山大將  
旗に星章五つ記せるは當時臨時に作りて入城せしもの、由にて、星章は陸軍をあらは  
し、四方の四つは四箇軍團を表はし、中央の大星は總司令部を意味したるもの、由、

一三五頁東郷大將三笠艦にありて指揮する圖は、當時の實景寫真、浮標を以て禪丸を  
防ぐ装置のあるに注意。

一四〇頁の明治天皇は説明するまでもなく、御眞影である。

一四三頁の明治神宮は代々木に建てさせられた神宮の御眞影で、南面してゐる。向つ

て左より樓門、中央のが拜殿、ここまで一般人は参拜することが出来る。一番の奥が御神殿でこゝに明治天皇と照憲皇太后とを祀り奉る。内廊と外廊との間にある建物は陸下御参拜の時の便殿等のある所である。

一四六頁御即位禮の圖は、紫宸殿大前の儀を表はしたもので、永久不變の國體の精華を表徴する儀式の様を偲ばせよ。

一四八頁、一四九頁の我が飛行機が青島の無線電信所を襲ふ圖は、此の山は今神尾山と稱する山、一四八頁の左方にある建物は總督の官邸である。遙か遠くの山の麓の所にあるのが青島の市街である。

情意方面の解剖 道德教育の資料としては殆んど各課とも相當の力あるものであるが特に

○旅順開城の際城中の將校に帶劔して本國に歸るを得せしめし事

○北宮川宮風土の病にかゝらせながら橋にのりて指圖し給ひし事

○丁汝昌の毒死（部下を犠み且つ自己の責任を重じたる點）

○佐野常民の博愛社

○本居宣長三十五年間の精勵

○新井白石の友情及びその苦學

○大石良雄等の忠義

○徳川光圀の義理

○蔚山籠城と清正の信義

等は之をこのまゝ修身教材としても少しも差支ないのみでなく、却てより有力である事は藤岡氏のお話の通りである。之等を深刻に取扱つて行けば史實の教授としても勿論十分であるが、道德教育人格陶冶としても悔り難い力となるものだ。

偉人幼時の生ひたちは大抵各人物に就て述べられてある。これは兒童と云ふものを強く頭におかれて編纂された結果と思ふ。そしてその幼時の逸話を澤山に出されたの

は先に藤岡氏の話にあつた通りの趣旨である。今試みにその中の三四に就て著者の見解を述べておこう。

○信長の幼時あらしかつたと云ふ事は、彼が桶狭間で奇功を奏する因となり、又怒つて義昭を追ふた事實にも思ひ合はされる。そして結局本能寺の變を招いた因ともみらるゝ。然しその半面に政秀寺を立て、政秀を弔つたと云ふやうな優しい心もあつたが、この心は後年勅を拜して感泣する彼の情的生活と照應してゐる。

○秀吉が幼時常に武事に心がけ、勇士の物語をきく事を喜んだと云ふのは、恐らく彼の一生を支配してゐる心事であつて改めて云ふ迄もない。

○家康の辛抱づよかつたと云ふ事も全く秀吉のそれと同じく、彼の一生を貫徹してゐる思想だ。彼の一生は實に穩忍にあつた。然も小鳥の逸話や、石合戦のそれは彼の創造性と彼の智謀とを語るもの、その穩忍と相まつて徳川三百年の基となしたものである。

○光圀が伯夷淑齋の故事に感奮した事は、彼をして大日本史を作らしめた基である。

○良雄が幼時、才を表はさなかつたと云ふ事は、彼が復仇の謀を立て、穩忍持久よく久しきに亘つてその鋒先を表はさなかつた事と思ひ合すべきだ。

○吉宗が殘の箱ぐるみ貰つたと云ふ逸話は、彼の豪膽を語るもの、後年洋書の禁をとき、外人より馬術を習はせた事の伏線であらう。

憊う云ふ風に一々吟味して行くと皆夫々の用意があつて出された逸話である事が分る。只だほつんと逸話を獨立したものゝやうに取扱ふのはよろしくない。

最後に如何に國民たる志操の養成——國民性格の訓練に留意されてあるかを一瞥しよう。

尊王思想の勃興、武家政治の倒壊等に就ては、藤岡氏の話が既に大要ながら要をつくしてゐる。右の外に一貫して教科書中に流れてゐるものは皇室中心主義の思想であ

る。即ち——挿繪の大半が皇室に關するものである事を以てしても之を知る事が出来る。然もその多くが愛國の至情を表現してゐるものである。記事中には列聖の御盛徳を詳述し之を欽仰せしむるやうになつてゐるのは一讀してわかる。次に勤王の事績に至る處に精叙し、敬神崇祖の事實を語り、勳臣の神社に祀らるゝ事を多く述べ更に往々人物の事績に對して編者の批判を下して其の態度を明にしてゐるなど、誠にこの態度を以てこり固つてゐるものと云つても好い。これらの取扱に就て一々詳述する時は各課の取扱になり、本書の余白が之を全うし得ない事であるから、その一々に就ては教授者の研究にまつ事にして一先づこゝで本項の章をおく。

### 三 文化史的にみた尋常小學國史

改訂の小學國史がいろいろな點に於て實際家、批評家の満足をかつてゐるのは事實だ。著者も其の兒童心理に顧み、國民たる志操養成に本義をおきたる改正ぶりに十分

の賛意を表する。然し批評するものは余りに戦争の記事が豊富で文化史に乏しいと云ふ。なるほどさう思つてみれば文化史の材料たるべき記事は至つて乏しい。小學校の國史がやゝもすれば侵略思想を鼓吹し、軍國主義尙武主義の心酔者を作らうとする傾向がある事は既に縷説した。それらの點に鑑み小學校の國史教授は努めて國際關係の圓滑を缺くが如き事項の取扱に注意し、然も將來の發展上文化史に重きをおかねばならぬと信ずる事も今又改めて論ずる迄もない。

然しながら小學校の兒童には文化史は興味が少ない。加ふるに日本歴史の上からみても、文化史的な材料は乏しい。それやこれやで尋常小學國史には此方面の記述が乏しい。これは又止むを得ない事であらう。と云つて編纂者は決して文化史の取扱を疎外したと云ふわけではないと思ふ。力めて文化史的には記述されてゐなからうが之を取扱ふ人の考によつては相當の効果をあげうると信ずる。然らばいかなる點に着眼し、いかなる考を以て之を取扱ふべきか、今尋常小學國史下卷に就て其の大要を述べよう。

挿繪を通して 殆んど毎課に挿入された挿繪は之を種々の意味に利用することが出来るが、今は之を以て文化進展の跡を語るものとして眺めてみたい。人物の服装、武器、髪、建築物、船、車、行幸等の様式に着目して之をみる時は、時代によつて其の進展の後が一目瞭然する。これは誠にいゝ文化の進歩を物語るものだ。取扱の折に一寸注意し前と比較させる事を忘れてはならぬ。

- 二二頁 武裝（これ以後この種の武裝殆んど出です）
- 一三頁 聚樂弟——建築物、行幸
- 一六頁 舟——軍船
- 二二頁 僧侶の服装
- 三〇頁 武裝。（輕装となる）武器鐵砲を使用せるところに注意
- 三二頁 大名の服装、室内の裝飾
- 四四頁 本箱、書籍（現代のものと比較せよ）

- 五〇頁 武裝（鎧、兜を用ひざるところに注意）
- 五四頁 朝鮮の文化
- 五八頁 當時の洋装を伺ふにたる
- 六五頁 かぶりもの服装
- 七二頁 皇居の建築様式（御門）
- 七九頁 當時の煙突（既に煉瓦を用ひたり）
- 八二頁 汽船（今日のものとは比較してみよ）和船
- 九八頁 武裝（和洋折衷の點に注意し、前と比較せよ。大砲あり）
- 一〇六頁 鳳輦（現代の行幸と比較せよ）
- 一一六頁 議場、及び天皇の御装（洋装となれる點）
- 一二〇頁 鹵簿。（一二三頁のそれと比較せよ）
- 一二二頁 武裝、（全く洋風となる。九八頁と比較）

一四八、飛行機（武器としての）

若し之等の繪を上古から書きとつて一幅の繪卷物に作り上げるときは既にそれ許りでも文化發展の跡を一目瞭然とする事が出来る。これらのものゝ取扱はすべて現代のそれと比較して古をかへりみると共に、其の時代々々に於ける文化の一斑を了解せしむる爲に活用するがいゝ。

記事中に表はされた文化的事實

織田信長 京部の復興と、朝庭の御儀式再興（六頁）

豊臣秀吉 「……はがらざりき、今日また太平の様を見んとは」以下（一四頁）

徳川家康 方廣寺の大佛（奈良大佛以上の大きいもの）（二八頁）

學問を興し云々（三二頁）

徳川家光 教會、學校を立てしめ云々（三四頁）

徳川光圀 宗教に關する事項全課悉く文化史的材料

大石良雄 淨瑠璃芝居等の流行（四七頁）

新井白石 多くの書物を著す（五五頁）

徳川吉宗 よく藩を治む（政治——）（五七）  
産業をすゝめ、洋書の禁をとく（六〇頁）  
大岡忠相を用ふ（政治）（五八頁）  
産業をすゝむ（六〇頁）

松平定信 文武の道を勵ます（六三頁）  
勤儉をすゝむ（經濟——六二頁）

同數多の書物を著す（六六頁）

本居宣長 全課

蒲生君平 殆んど全部

攘夷と開港 子平の生ひたち（七五頁）

齊昭の政治（七九頁）

通商條約を結ぶ（八五頁）

第十一章 編纂者の意見に依る小學國史の活用

吉田松陰松下村熟云々(八七)

明治天皇 本課以下即ち維新以後の歴史は二三の内亂、日清、日露及世界大戰等可なり澤山の戦争記事にみたされてゐるが、それでも殆んど其の大部は文化的にながめて行く事が出来る。歩一歩文化の程度を高めて來た様子を尤も鮮明に展開して行くべきだ。

かう拾ひあげて見ると、あなたがち文化史的材料に乏しいとも云へない。之等の材料を生かして使つたならば随分効果も多い事であらう。然しながら兒童心理の上から考へると、彼等はどうしても戦争記のやうな勇ましいものを好み、文化史的な事はさつぱり面白がらない。で其れだけのものを取扱ふに際しても余程その點に注意して取扱を巧にしないと駄目だ。それが爲にはそれに關係ある諸種の方法(繪葉書のやうなものでも好い)を蒐集し、之を直觀的にすると共に、其の事項を只だ報告的に説話するに留めず其の時代の特徴や、人心の趨向、乃至その人の精神生活等に結びつけて、趣

あらしめなくてはならぬ。

## 附 歴史趣味の養成

家庭教育 社會教育と相まつて國史趣味の養成に着目したい。これは國史教授を盛ならしむる効あると共に、一方國史教授そのものゝ力にまつ事が多い。今氣づいた點の二三について簡単にのべてみよう。

郷土史の活用 ここに郷土史と云ふのは、凡て次の各種のものを包括してゐる。

1. 其の郷土から輩出した史的人物の事蹟、傳記
2. 其の土地を背景(又は舞臺)として行はれたる史的事件
3. 其の地方に存在する古寺社及他の遺蹟
4. 其の地方の傳説
5. 其の地方に現に遺存せる古器物、古文書等

第十一章 編纂者の意見に依る小學國史の活用

それらの事物を夫々に利用する。(1)、(2)、(3)等に関しては之を一まとめにして郷土讀物を編纂し一般並に學校に於ける課外讀物とするが好い。地方教育會の事業として好適な仕事である。

(3)は其の事蹟を明にし、折々學校兒童及び青年團員等を引卒して臨地教育の資料とするが好い。(現地に望んで其の事蹟を語り、あるは其れに關係ある時代の歴史を語るなど)

(5)に就ては既に述べたやうに、歴史會と云ふやうなものを催して學校に陳列し一般の觀覽に供すると共に、兒童教育の參考にする。一定の期間學校博物館に陳列する事が出来れば大に結構である。

これらの事は單に學校の爲ばかりではない。所謂郷土文化の開發である。趣味の向上にも極めて好い事だ。

歴史讀物の刊行 史的内容を盛つた諸種の讀物を刊行して一般に其の趣味を鼓吹す

ると共に、一方兒童の歴史教育をたすけしめたい。歴史讀物の中には次のやうなものがある。

- (1) 歴史繪本、史上の人物を繪草紙にしたもの、就學前のもは元より、入學後の兒童にとつても興味多いものだ。
- (2) 歴史的人物の肖像、其の郷土出身者なら尤も好い。でなくとも然るべき人物の肖像を家庭や學校にかける。
- (3) 歴史繪物、繪本より少し程度の高いもの、簡単な文句を入れて説明をたすくるやうにしておく、尋四以下のよみものに好い。
- (4) 兒童歴史讀本、小學國史に關係のある事項を拾ひ、之を比較的精細に叙して兒童の趣味に適するやう編纂する。表現の仕方を兒童向にし、從來のありふれたものに新味をばしめなくてはならぬ。前にあげた戯曲の形式をかりたものなども尤も好いだらう。著者は本書の趣旨を普及せしむる爲にも是非さう云つたものをかきたい



と思つてゐる。自由學習を勧め、優等生の伸展を計るならば、是非それは必要なものだ。

(5) 講談本の改良。新聞が少しうれなくなると義士銘々傳を出せばすぐに讀者を恢復すると云はれた程我國民は義士すきで又講談すきだ。講談ものは今日殆んど全盛の感がある。然し現在のものは餘りに荒唐無稽のものが多くて心ある人物は讀まないから、之をも少し史實に接近せしめ、面白く表現したものを一般民衆のよみものとしたい。

(6) 歴史小説及戯曲。既に前にも述べたやうに近來だん／＼史上の人物を主人公にして小説や戯曲を作る人がふへて來た。此の傾向は面白い事だと思ふ。教師自らもかゝるものを愛讀する一方、自らも筆をそめてみる事はいゝ事だ。それらのものが相まつて一般に家庭、社會に讀まるゝやうになつて行けば國史趣味は十分に行きわたるであらう。

史劇及活動寫眞、史劇に就ては申す迄もない。

學校で折々簡単な脚本を作り學校劇を試みるが、學校劇は都會地の學校ではやゝ大仕掛にやれる。廣島高師などでは電氣まで利用して可なり大々的にやつてゐるやうだ。田舎ではそんな事は出來ない。先づ脚本を共同して作るが好い。それから舞臺裝置、服裝等に就ても相談合できめる假面をかぶつてやつても好い。何も顔まで作らなくても好いが、服裝等にお伽式な考案をこらするのは面白い、委しくかきたいが紙面がないから割愛する。

最後に聲を大にして社會に訴へたいのは歴史活動寫眞の活用だ。既に外國ものでは史實を撮影してやつてゐる。例へばシーザーの時代とか、ナポレオンの一代記だとか云つたやうな風だ。我國でも水戸黃門一代記など云ふものはあるが、それは先に云つた通俗の講談をそのまま寫したもので餘りに史實に遠い。著者の理想を云へば神代から現代に至る歴史を幾巻か續けて撮影したら尤も好いと思ふ。これが出來れば小學

校の歴史教授は至々之によるが、然しそれは商賣にならぬならば、まだやり方もある。それは史上の主なる人物を材料にして相當な作家に脚本を作つて貰つて之を演出し撮影する事だ。これが行はるればどれ位歴史趣味養成の上に効果あるかも知れぬ。數歩譲つて現に撮影映寫されてゐる講談風のものでも之を年代の順に排列して映寫する時は、その時代々の風俗習慣等を直觀せしめ、一方年代の經過等を明にして頗る効果の多いものである。篤志の人の出現して之を試みん日をまつ。

其の外歴史趣味の養成としては史的遺物、遺蹟建築物、繪畫等の復寫物繪葉書等を刊行し之を普及せしめることもなかくに力がある。讀本や修身が歴史に其の教材を仰ぐは一面歴史趣味をたすけるものだ。以上いろいろの方面合せて之に向つたならば歴史はなかく盛になつて行くが、一つ二つでも好いから小學校が中心になつて實行したいものだ。

## 第十二章 明日の歴史教育

○教材の撰擇

○叙述の仕方

○歴史と修身

○愛國心の問題

愛と犠牲と協同との基調に立つて撰ばれた民衆の歴史、それが明日の歴史である。然して平明率直なる態度を以て客観的に。然も直観的具體的に何等教師の主観的色彩を加ふる事なき——然り感激の押賣をなすことなき叙述の方法をとるもの、これが明日の歴史教授法である。明日の歴史教育は人類相愛の永久平和を標的とする。しかも永久に國家と民族の存在と發展とを企圖してゐるものである。

歴史教授に關聯して稽ふ可き事のアウトラインだけを一瞥した。然りたゞほんのアウトラインだけにすぎない。ふり返つてみれば案外に不徹底な個所も多く、自らも解決しきれない多くの問題を残してゐることを遺憾に思ふ。云はゞ本書は國史教授上の新興問題に就て第一指をふれたにすぎない。殊に私は現行教科書並に現行教育の諸制度と其の精神とを尊重し、つとめてこれを活かさんことに骨折つた。そこに多少の無理も存在する。私自身のほんとうな考をば現行の教科書に活かして盛ることは可なりに困難な事であつた。

極めて率直に云へば、現代の思想界が混沌としてゐるやうに、今私身の考にもまだはつきりせぬ所がある。にも係らず私が多くの新興問題にふれてきた事は聊か大膽にすぎない。たゞ私は私の小さき努力がやがて優れたる人士の輩出を促すものあらんことを喜んでまつものである。

若しも地上のあらゆる國々に優れたる爲政家が輩出し、吾等の新しい考——人類相

愛の思想に出發し、眞に世界平和の教育を試みんとする教育者が出現したならば、そして又それらの人々、國々が相携へ相競ふて和衷協同、眞に楽しい理想郷の出現にまで努力せんとする時代が來たならば、——吾等は此の如き時代の出現にまで努力したいものであるが——其の際に於ける歴史教育と云ふものは、在來のそれに比して餘程趣を異にするべきであると信ずる。かりに私は其の場合に於ける歴史教育を『明日の歴史教育』と稱してみたい。

教材の選擇 明日の歴史教科書には殺戮攻争の記事の代りに次のやうな事柄が多分に採擇せらるゝ。

- (一) 地上のあらゆる人々が互に相協同して、教育、藝術、宗教、經濟等の文化的事項の進展に努力し來つた事蹟。
- (二) 自己を犠牲にし其の所屬民族のため、或は人類のために貢献し來つた人々の行爲
- (三) 互に相扶け相愛し合つて來た民衆の事例。

此の標準によつて撰ばれた歴史は、まさに愛と協同と犠牲の歴史である。民衆が文化開展のために自己を犠牲し、互に協同し來つた人類愛の發達史である。何故かくの如くあらねばならぬか。思ふに過去の歴史は闘争と孤立と怒のそれであつた。人々互に爪牙をとき、弱きを挫き他の虚をつき、以てあらゆる人類を、自己若しくは自國の配下に従はしめんとする努力の連続であつた。そこに絶えざる興亡の波が起伏した。其のめざす到達點は力による全人類の統一であり、力による我執我慾の際限なき發露史であつた。

吾等の理想とする次の時代の歴史は前述の如く愛と犠牲とを以て、自ら全人類が手を採り合はんと欲するのである。其の到達點に於て地上のあらゆる人々が一點に趨歸することに於ては從來のそれと全く相同じい。飽迄も協同提携して以て人類の欲求を満足せしめん事に努力する。前時代の人々の努力が、やがて其の目的を達せんとしては無解し、瓦解しては穩忍し、かくて様々の文化の華を醜慘なる泥土に委して、永き

日の努力が水泡に歸して了ふ許りでなく、それらの人々の欲求は遂に永久に達せらるゝ事なくして葬られて了ふではないか。吾々の理想とする時代の歴史はかくの如き迂愚を反覆せしめぬやう、豫め新しき目標に従ふて、美しい内容が撰ばるゝ。吾等の兒童は之によつて其の進むべき將來の方途を示唆され、其の途を誤らぬであらう。かくして來るべき時代には鬪争殺戮の醜慘なる姿を現する事なくして、すべての人々は自然界を利用し活用し以て、あらゆるその欲求を満たさんと欲するのである。かくてこそ世界のユートピアは出現さるゝであらう。さう考へると吾等はどうしても明日の歴史書を初に述べたやうな内容を以てする必要が生ずる。

過去の國史上には、或は此の如き事蹟は余り豊富ではないかも知れない。然し既に述べたやうに歴史は一の觀方である。觀點のおき處によつて如何にも之を變更しうるものである。今や二三の篤學者によつて、恣うした考による日本歴史が編み出されんとしつゝある氣運は、何人も之を認め得る事であらう。かくて國民の日本史は完成す

る。深き愛の歴史は編まれ、文化史は提供さるゝであらう。

叙述の仕方　かくて擇ばれたる教材を如何に叙述するか。第二の問題と云ふのはこれである。現行教科書の如きは極端に主觀的色彩をおびたものである。著者その人の主觀を強く織り込んだものである。即ち隨所に人物に關する批判、褒貶の辭が挿まれてゐる。國家が次の國民に向つてする希望と要求とを、かゝる間に強く打ち込まんとするの努力に對して、吾等は別に反對するものではない。國民性格の養成に向つて多大の力を注ぎ、歴史を以て修身科のその如くにまで使命づけんとする方針に對しては、吾等は之に賛意を表して來た。

然し乍ら明日の歴史教育にはこの事の必要を認めない。否かくする事の不可なるを思ふものである。現行のそれは余りに教師をあぶなげにみたものである。あれだけに色づけられて居れば、いかなる凡くらな教師でも之を誤ることはあるまい。然しこの方針で行く時に吾々は感激と褒貶の押しうりをされるが如き感じを抱く、重盛を忠孝兩

全の感すべき人として稱賛することは、かりに異義なきものであるとしても、其の感激を教科書の力によつて押しうりする必要はない。かく押賣することは兒童の創造性を傷け、彼等が有する批判の眼を掩ふものではあるまいか。

教師及編纂者、更に溯つては國家そのもの、眼——主張は遠く其の教科書の裡にかくれて居ればいゝ。換言すれば教材選擇の方針にひそんで居るのである。さきに叙べた如き方針によつて擇ばれた教材に對しては、更に再びその叙述の間に於て露骨なる主觀の表現をなす必要はない。編纂者は平明に其の事實を叙述すればいゝ。然して教授者も亦平明に之を説述すればいい。感激と批判とは兒童自らが自ら行ふべきものである。偉大なる愛の精神にふれては自ら兒童も感激するであらう。犠牲的行爲に對しては期せずして彼等もふるい立つであらう。そこに擇ばれた教材そのもの、力があべきだ。

明日の歴史教育は自由と創造のそれである。兒童は自らの内に芽ぐめる愛と理性と

の力によつて、事例を批判し、感激の創始にまで努力する。教師は平淡なる事實の紹介者にすぎない。第三者としての介在にすぎない。教師あるが故に兒童は事實の真相を確知する事が出来る。然し教師の主觀に禍されて、自己自身の主觀をくもらすべきではない、教師の雲に掩はれて、自己の明鏡をくもらす事はよろしくない。兒童はあくまでも自己を表現しなくてはならぬ。自己を磨かなくてはならない。教材は砥石である。教師はその際の水滴にすぎない。砥石の質が及物の質に適合すべきは云ふをまたない。

教材の取次者、教材と兒童との間に介在する第三者たる教師を目して、善音機と貶稱するものがある。教材は教師の人格を通して後、與へらるべきだと論ずる人々の所論だ。面白い比喻であり、好い着眼である。然し人格を通すと云ふことの意味を余りに平俗卑近に考へすぎてはいけない。

人格を通してと云ふことは、何も教師の小主觀にてらしてと云ふことではない。教

師の小さき感激と小さき理性と、偏狭なる批判とを強制せよと云ふことであつてはいけない。教材を平明率直に取次ぐことに唯が人格の影響なきことを斷言し得ようぞ。蓄音機にさへ尙且つ夫々の演奏者の人格が表現さるゝではないか。

人格化と小主観化とを混同する勿れだ。自己の小さな主観に基いて妄りに褒貶を試み、其の性癖に基いて好惡の押うりをするが如きは尤も強く兒童の獨自性を害ふものである。劃一と強制の教育によつて生まるゝものは小さき型の弱き民衆のみである。明日の教育は潑刺たる偉大なる強き民衆の養成を目標とすべきである。

かくて吾等は客觀的表現を主張する。つとめて事實を如實に表現せんことを主張する。事實事例が起つた其のまゝの真相を傳へうる事が出来れば、これ上乘の教授である。然して吾等は客觀的表現の裡に十分に教師の人格が働くことも信じて疑はない。即ち客觀的表現は決して教師の人格と没交渉に出来るものでないと云ふことを信ずるものである。

兒童の個性は千態萬様である。彼等は取扱はれたる材料に相應じて夫々各異の印象と感銘とを興す。それは各人各様であつて初めて面白い。教師の感心することに對して必ずしも一樣に感心せしめなければならぬ事はない。しかしながら人間性の奥に秘める靈の中には、地上のあらゆる人々に共通なあるものが存在する。その事實を目撃すれば、何人と雖も何等の強ひらるゝ事もなしに自ら感激せざるを得ぬ場合がある。若し歴史教育が感激を要求すれば其の點を目ざせばいゝ。その點それが何物であるかは私はこゝに具體的に概言し得ない。然しながらさきに述べた教材撰擇の標準がやがてそれであることを信ずる。偉大なる愛と犠牲と協同との事例に接した時、何人か感激しないものがあらう。

最もこゝに注意すべきは主觀の色彩を加味しないと云ふことゝ、教材を具體的に表現すると云ふことゝは自ら區別がある。叙述されたる事實を兒童に説述するに際して教師は兒童の發達程度に應ずるやうに之を打ち碎き、然も事實の真相を如實にみるが

如くならしむる爲には、つとめて具體的に直觀的に表現しなくてはならぬ。これは既に前來のべ來つた通りであつてこゝで又反覆する必要はあるまい。

歴史と修身 歴史は材料そのものが多分に修身的の効力を有つて居る。強いてさうしようとして云ふ色付をしなくとも、其れを取扱ふことによつて自ら修身科の助力をしてくれる。然し歴史で達しうる處の修身的價值は主として對人的の方面である。國家とか社會とか、人類とか云ふ對他的の關係交渉に就ては余程よく其の心得を示現しうる。殊に現行の歴史教科書の如きは國家に對する國民としての心得の殆んど全部を擔當してゐるやうな感がする。そこに行くといふ今の修身科のやることは誠に力ないものである。今の修身科ではいろいろ廣汎な事をやつてゐるがどれ一つとしてしつくりと力強く子供の靈にくひ込んで行くものはない。

私は修身科ではもう少し兒童の心をほりさげて行く事をやつたがいゝと思ふ。子供の心にも深い思索と省察の余地はある。導きやうによつては随分深いところまで反省して行くものだ。今の修身教授のやうに、單なる一舉手一投足のことをかれこれ欠釜しく云はないで、もつと根深い所に芽ぐんで人間性に培ふて行つたがいゝ。そして今のところ對國家的感激の如きは歴史科の方にすつかり打ち任せたらどうだらう。修身の材料としてよく國史からとられたものがある。然しほつりほつりと引き出され、其の人物の生れた時代も、前後の關係も全く不明だし、又その人物自身の前後の關係等も述べられず、ある一部分だけを切りとつて出されてゐる事が多いために、其の例話は誠に力ないものだ。そこで余儀なく修身科でも歴史の取扱を多分にやらされてしまふ。だから寧ろそんな事は歴史の方に打ち任せてしまつた方がいゝ。

歴史は横の關係、ひろがりの上に於ける修身であり、修身は深さの上に於ける修身であるがいゝ。愛と犠牲と協同と、これはやがて對他的關係のすべてであり基調であ



る。この精神に徹すれば殆んど修身科のあらゆる役目に通ずる。小さな國家主義者に云はう。愛は全人類に向つての、否萬有宇宙に向つての人の道である。犠牲は國家に對して尤も強く表現さるゝ。然して社會聯帶のそれが協同であることは云ふまでもない。小さな國家主義者が、明日の歴史教育を批議せんとする理由は、國家の存在と其の富強を熱望するの一事に存する。明日の國史教授がそれを否定するものでない事はその云ふところを少しく吟味すれば直に釋然たるものであらう。固苦しい倫理論者が云ふ對社會、對國家、對人類への諸徳目のすべては、明日の歴史教育によつて十分に達し得らるゝ。即ちこの意味に於て明日の歴史教育は完全に修身科である。強制したり押し下りしたりすることのない修身科である。

愛國心の問題　イギリスの豫言的創作家ウェルズは世界國家と云ふものを提唱してゐる。其の考は現代の合米合衆國から出發してゐるらしい。即ち合衆國に於ける各々の獨立せる一洲が、世界國家の場合に於ける一國である。日本なり、イギリスなり、

フランスなりは夫々其の國家としての獨立と存在と特權とを有し乍ら、更にすべての國家を統一すると云ふのである。現今の如くあらゆる國々が割據し鬭争し、反目してゐる事は世界の文化發展上にどれ程の障害があるか知れない。従て人類の幸福を増進するにも非常な邪魔である。一寸外國に旅行するにもなかなか面倒で、いろいろな手數が入る。この國と國との障壁を解放する事が出来たならば、どの位文化の進展に貢獻ある事であらうか。この提案は明日の歴史教授者にとつても一考に値する。國家の存在を否定することなくして世界の永久平和を嚮望してゐる人々にとつては誠に好箇の提案である。軍備縮少や國際聯盟の開展は將來に於て恚うした考にまで到達するであらうと信ずる。

本書の余白に採録したやうにラッセル氏は愛國心の功過を論じた中に、愛國心は其の出發に於ては正しいが、やがてそれが發達すると他の侵略を企てんとする源になることを指摘した。愛國心は吾等の靈の奥に秘むものゝ一つである。何人と雖もその國

と其の民族とを否定する人はあるまい。何となればそはやがて自己否定そのものであるから。乃ち吾等は國を愛する。恐らくラッセル氏自ら雖もその英國と英民族とを愛せぬ事はないであらう。かくて吾等は愛國心の存在を決して悪いと思はない。當然之れあるを正しいとする。只だラッセル氏が指摘した如くに之れが他國の攻略にまで進むことは考ふべきことだ。私はさきに國民の發展についてのべ、大和民族の理想について語つたやうに、吾等は永久に活きんが爲に發展を企て、止まぬ。その爲に愛國心がいかに必要であるかは云ふまでもない。

しかしながらその發國心の發展は、ラッセル氏が云ふが如くに、又必ずしも過去の歴史が示す如くに戦争と共に終始するもののみではないと信ずる。よしや過去に於ける愛國心の表現が、多くの場合他國の侵略に向つてすゝんだにせよ。吾等は未來に於てもかくあるべしとは信じない。吾等は人間性の一つなる愛國心を肯定すると共に、之れを文化的に發展せしめて行かんと欲するものである。我國の文化をいやが上にも

開發する爲に、吾等は愛國心の力強き後援をまつものである。

無政府主義を奉ずる工業労働者の中には——恐らく我國には存在しないだらう。存在するが如く見えてもそれは似而非者だらうが——眞に國家を否定するものがある。彼等はたゞ賃金によつてのみ働く、より高き賃金を得れば彼等は何時でも國境を超越する。そして彼等の目ざす所は世界を横斷する労働者の大同團結である。世界的労働組合の完成である。彼等を目して國家は危険人物とする。國家にとつて國家の存在を否定するものゝ危険なることは當然である。

吾等は國家社會の現行制度に就て尙不備の點があることは認める。然し國家そのものゝ存在を否定する考になる人の心持は之を理解することが出来ない。現在の狀態に於て國家は尤も進歩し、發達した人間共存の組織である。人間の生存上、之れ以上進歩したものはない。過激なる労働者はその反抗氣分にあふられて國家の現行制度に不満を感じる余り、國家そのものを否定せんとするが、こは誤れるものである。彼等は

眼前の物質生活にのみ自己を任せてゐて、眞に自己を生きんとしてゐないものである。彼等が相當の富と物質とにありついた時、彼等は必ずや自己にめさめて、遠ざかつてゐた靈にまでよび返さるゝであらう。そしてその時こそ彼等の人間性のどん底にひそんでゐたあるものが頭をもたげて來、愛國の芽が僅に土を破つて出て來るであらう。彼等と雖も人である。有すべきものは必ず有する。血は之を外より淨めることも濁すことも出來るものではない。民族の血、そこに愛國心は出發してゐるのだ。

過去の歴史教授は不言不語の中にそこに觸れてゐた。明日の歴史教育も亦無意識の間にそこにふれて行く事は勿論であるが、更に合理的に明識に、國家の成立と價值と必要とに就て指示する處がなければならぬ。そして人々の靈の底にひそめる眠れるものを揺り動かして、之を成長させることが必要である。そのためには個人對國家の關係に就て好い材料が撰ばれなくてはならぬ。個人の個性を無視し、全然國家の權力の下に之を屈從せしめんとした極端な國家主義の不當なる事は既に述べたところである。

吾等は人類相愛の基調に立てる、世界の永久平和を熱望して止まぬ。吾等の小さき文化的努力は歩一歩、その目標に向つて續けらるゝ。然し眞に吾等の努力は微弱である。世界に於ける一部の識者殊に宗教藝術等になづさはる人々は何れも皆こゝに目標をおいてゐる。さなり誠に曉の鐘は明かに鳴りひゞいて東天の紅を語つてゐるが、幾千年來の永き眼りは容易にさむべくもない。わけて血と肉とに飢たへる、物と力との渴仰者たる一派の人々はこの間に介在して尙さかんに自己乃至自國の物的發展をほししまゝにせんとしてゐる。彼等のあるものは巧に表に愛と平和とを裝ひながら、裏に征服と併呑の計劃をすゝめて居る。やゝもすれば人類愛の美名を瀆しつゝそのあくなき物的欲求の發展をたくらむ。吾等はその姦手につてはならぬ。吾等は永久に國家の立場と使命とを思ふ。その上に地球平和の光はかゞやく。あゝ文化

の歴史にその第一頁を染めんとする若きゼネレーションは來つた。人々よ、眞に眼  
さめよ。暖き平和郷の眞建設はたゞ愛の精神によるわが教育によつてのみ可能であ  
る。げに教育第一である。

文化  
中心  
國史教授法  
終

大正十二年五月十一日 大正十四年四月十四日 大正十四年十月十二日	大正十二年五月十一日 大正十四年四月十四日 大正十四年十月十二日	大正十二年五月十一日 大正十四年四月十四日 大正十四年十月十二日	大正十二年五月十一日 大正十四年四月十四日 大正十四年十月十二日	大正十二年五月十一日 大正十四年四月十四日 大正十四年十月十二日
大正十二年五月十一日	大正十四年四月十四日	大正十四年十月十二日	大正十二年五月十一日	大正十四年四月十四日
大正十四年十月十二日	大正十二年五月十一日	大正十四年四月十四日	大正十四年十月十二日	大正十二年五月十一日
大正十二年五月十一日	大正十四年四月十四日	大正十四年十月十二日	大正十二年五月十一日	大正十四年四月十四日
大正十四年四月十四日	大正十二年五月十一日	大正十四年十月十二日	大正十四年四月十四日	大正十二年五月十一日

製複許不

發行所 東京市神田區錦町三ノ十一番地 東京五八〇番  
發行所 東京市神田區錦町三ノ十一番地 東京五八〇番

著者 志垣寬  
發行者 辻本經藏  
印刷者 關根慶寬  
印刷所 早稲田印刷株式會社

版發行刷  
奧附 文化中心 國史新教授法 定金貳圓五拾錢

發行所 東京市神田區錦町三ノ十一番地 東京五八〇番  
發行所 東京市神田區錦町三ノ十一番地 東京五八〇番

教育研究會

教育研究會

教育研究會刊行書目

東京女子大學 講師法學士	片山 哲著	婦人の法律	上四六 製判	定價金三圓五十錢 送料金十八錢
東京府立 第三高女教授 士	木下一雄著	女子の哲學	上四六 製判	定價金二圓三十錢 送料金十八錢
東京帝大教授 文學博士	吉田熊次著	最近教育思潮	上四六 製判	定價金三圓 送料金十八錢
東京帝大助 教授文學士	入澤宗壽著	新教授法原論	背四六 皮判	定價金三圓 送料金十八錢
	田制佐重著	教育的社會學	背四六 皮判	定價金三圓五十錢 送料金十八錢
五高教士 教授	八波則吉著	讀本國語の講習	上四六 製判	定價金三圓 送料金十八錢
五高教士 教授	八波則吉著	第二國語の講習	上四六 製判	定價金三圓五十錢 送料金十八錢
東京高師訓導 小林佐源治著	中自學 讀み方教育	第三國語の講習	上四六 製判	定價金 送料金
			二上 册下	定價各三圓 送料各十八錢也

教育研究會刊行書目

京都帝大 研究室文學士	高橋俊乘著	日本教育史	背四六 皮判	定價金三圓 送料金十八錢
文學士	高木秀一著	個人價值論	背四六 皮判	定價金三圓 送料金十八錢
陸軍教授 文學士	大村桂巖著	教育學汎論	布菊 裝判	定價金三圓 送料金十八錢
東京帝大 研究室文學士	鶴藤幾太著	實際教育論	上四六 製判	定價金三圓 送料金十八錢
實業補習 教育主事	千葉敬止 森茂共著	公民科精義	上四六 製判	定價金三圓五十錢 送料金十八錢
醫學士	高峰 博著	精神分析學	上四六 製判	定價金 送料金
武藏高等 學校教頭	山本良吉著	若い教師へ	裁菊 判半	定價金三十五錢 送料金四十五錢
同	山本良吉著	訓練の四理想	半菊 裁判	定價金三十五錢 送料金四十五錢
佛	ロアゾー氏原著 三島章道譯	少年團概論	上四六 製判	定價金十二圓 送料金十八錢也

教育研究會刊行書目

東京高師 前調	東京兒童の村 小學校調	東京兒童の村 小學校調	九大教授 文	東京市政調查會編	東京高師 前調	文部省少年團 調査委員	奥寺龍溪著	櫻葉 勇著	千葉女師校長 文
水 木 梢著	野村芳兵衛著	峯地光重著	松濤泰巖著	自治及修身教育批判	水 木 梢著	奥寺龍溪著	列強少年の社會教育	實演修身例話資料	平田華藏著
中心文化	中心文化	中心文化	中心文化	上 菊	上 菊	上 菊	上 菊	三年用 上 菊	上 菊
算術新教授法	修身新教授法	國語新教授法	全我活動の教育 <small>(プロジェクトメントの批判的研究)</small>	教育教授の高等批評	少年團訓練法要義	列強少年の社會教育	實演修身例話資料	教育者のための心理學	教育者のための心理學
上 四六	上 四六	上 四六	背 四六	上 四六	上 四六	上 四六	上 四六	上 四六	上 四六
製判	製判	製判	皮判	製判	製判	製判	製判	製判	製判
定價金二圓五十錢	定價金二圓五十錢	定價金二圓五十錢	定價金三圓也	定價金一圓三十錢	定價金一圓三十錢	定價金一圓三十錢	定價金一圓五十錢	定價金一圓八十錢	定價金一圓八十錢
送料金十八錢	送料金十八錢	送料金十八錢	送料金十八錢	送料金十八錢	送料金十八錢	送料金十八錢	送料金十八錢	送料金十八錢	送料金十八錢

教育研究會刊行書目

第五高等學校 教授文學士	文學博士	文學博士	青木文學士 淡路文學士	熊本師範教諭 文學士	東京高師 前調	東京兒童の村 小學校調	東京兒童の村 小學校調	廣島高師調	奈良女高師 教授
八波則吉著	吉田熊次著	榑崎淺太郎序 丸山良二著	岡部文學士共編	田花爲雄著	水 木 梢著	志 垣 寬著	峯地光重著	菊地勝之助著	石澤吉磨著
中心本	中心本	中心本	中心本	中心本	中心本	中心本	中心本	中心本	中心本
國語教育概說	輓近の教育及教育學	メンタルテストの要領	入學試験のテスト	各科教授學習精義	理科新教授法	國史新教授法	綴方新教授法	地理新教授法	家事新教授法
布 四六	背 四六	布 四六	紙 菊	背 四六	上 四六	上 四六	上 四六	上 四六	上 四六
製判	皮判	裝判	裝判	皮判	製判	製判	製判	製判	製判
定價金二圓也	定價金三圓八十錢	定價金一圓三十錢	定價金一圓也	定價金三圓五十錢	定價金二圓五十錢	定價金二圓五十錢	定價金二圓五十錢	定價金二圓五十錢	定價金二圓五十錢
送料金十八錢	送料金十八錢	送料金十二錢	送料金八錢	送料金十八錢	送料金十八錢	送料金十八錢	送料金十八錢	送料金十八錢	送料金十八錢

教育研究會刊行書目

武蔵高等 學校教頭	山本良吉著	新訓練論	上四六判	定價金 二十八錢
東京帝大 教授文學士	阿部重孝著	藝術教育	背四六判	定價金 三十三錢
朝鮮帝大 教授文學士	松月秀雄著	適性教育	背四六判	定價金 四十八錢
文學士	松月秀雄著	個性教育	背四六判	定價金 四十五錢
武蔵野學院 文學士	菊池俊諦著	感化教育	上四六判	定價金 三十八錢
第一高等 學校講師	和田八重造著	家庭科	上四六判	定價金 三十四錢
東京高 前副導師	水木梢著	校長學	上四六判	定價金 二十八錢
東京帝大 文學士	石田利作著	訓練導論	上四六判	定價金 一十八錢
東京帝大 研究室文學士	岡部彌太郎著	知能測定的測定法	背四六判	定價金 四十七錢

教育研究會刊行書目

第五高等 學校教授文學士	八波則吉著	教育に安住して	布四六判	定價金 三十八錢
東京帝大 教授文學士	入澤宗壽著	國民教育の思潮	布四六判	定價金 三十八錢
入澤宗 校入澤宗壽	山崎博著	學校體育	上四六判	定價金 三十八錢
東亞協會 文學士主任	神代峻通著	社會問題十五講	上四六判	定價金 三十八錢
ウシヨ ハ原著	木下一雄譯	人間相愛の道德	上四六判	定價金 三十八錢
九大教 文學士	松濤泰巖著	國民教育講話	上四六判	定價金 二十八錢
文學士	林鎌次郎著	最新歐米教育史	背四六判	定價金 三十八錢
東京女子 師範學校 校長文學士	龍山義亮著	教育制度の新潮	背四六判	定價金 三十八錢
東大助 文學士	阿部重孝著	ドルトン案の教育	背四六判	定價金 五十錢
文學士	入澤宗壽著	新地理教育	上四六判	定價金 三十八錢

目書行刊會究研育教

醫學博士 竹内薫兵著	文學士 林圓應譯	文學士 吉田熊次編	文學士 八波則吉著	文學士 濱田廣介著	久留島武彦著	佐野敏一著	千葉敬止著	鈴木信一著
愛兒の育て方と病氣の手當	教育學概論	ドルトン・プランに對する	童話と夢の國から	童話集 椋鳥の夢	童話集 羊仙人	童話集 つんぼの兎	公民科要義	中等新圖學
布四六裝判	布四六裝判	布四六裝判	美四六裝判	美四六裝判	美四六裝判	美四六裝判	全三冊	大三冊
定價金三十八錢	定價金三十五錢	定價金	定價金二十八錢	定價金二十八錢	定價金一圓三十錢	定價金一圓三十錢	各冊定價三十八錢	檢定書

東京美術師範學校  
武藏野女子高等學校  
等學藏校講師

醫學博士 竹内薫兵著  
文學士 林圓應譯  
文學士 吉田熊次編  
文學士 八波則吉著  
文學士 濱田廣介著  
久留島武彦著  
佐野敏一著  
千葉敬止著  
鈴木信一著



263.6  
78

終

